

519.8-176-5ウ

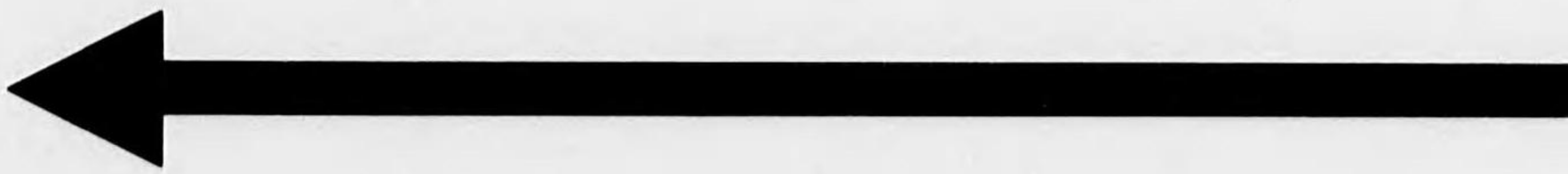


1200500745142

519.8
76
⑦



始

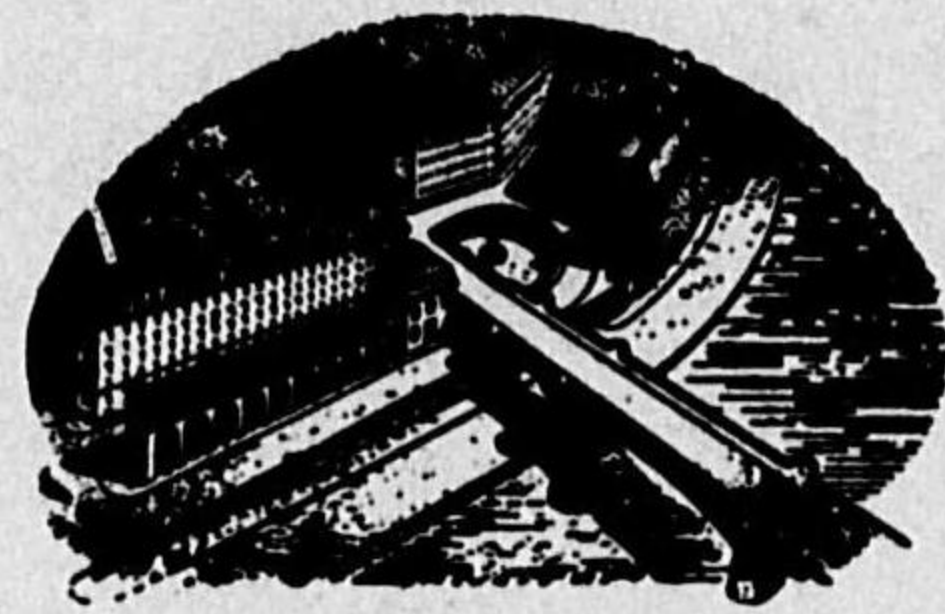


33.12.22

2983



519.8
I.76
5

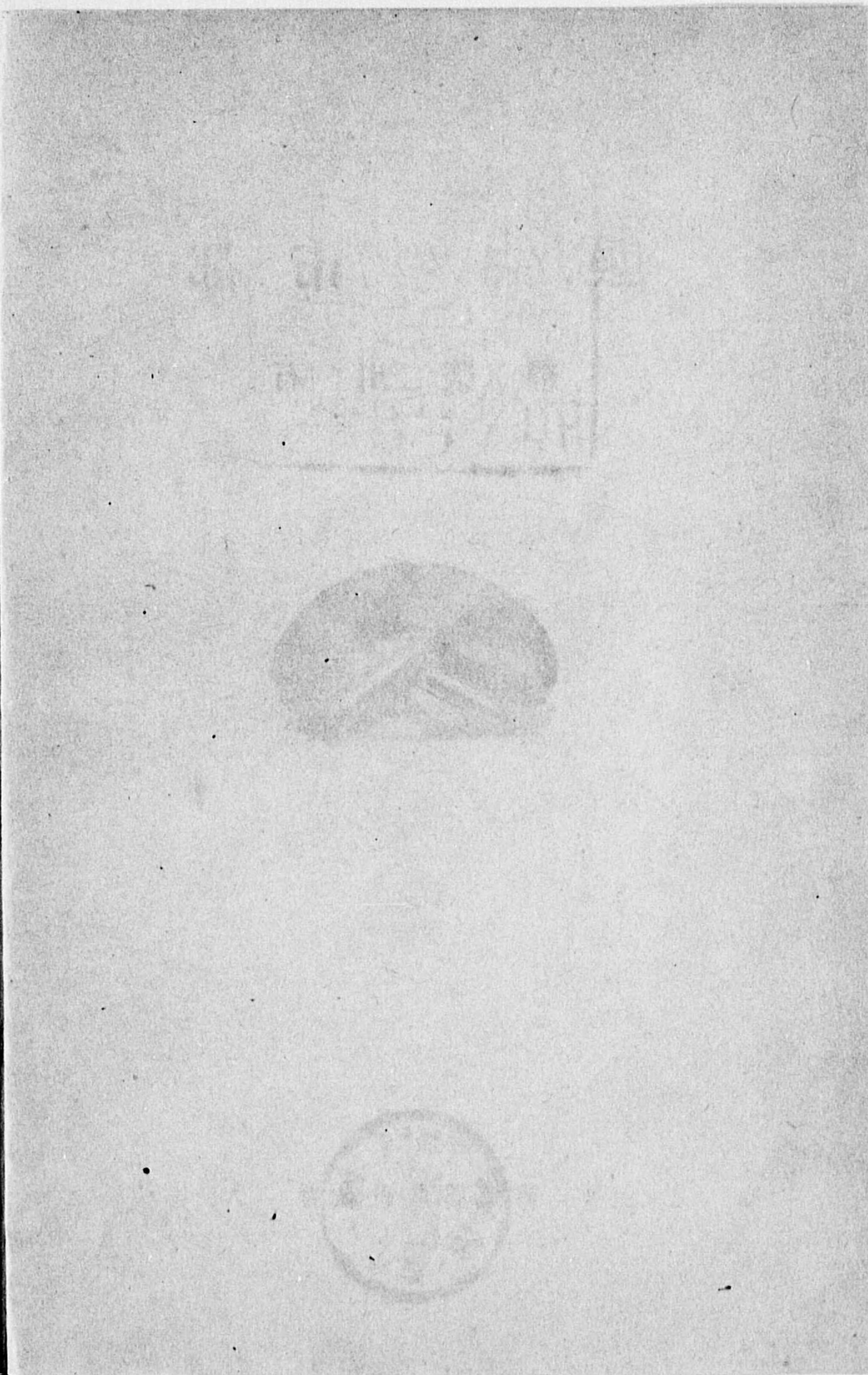


春秋社教養叢書





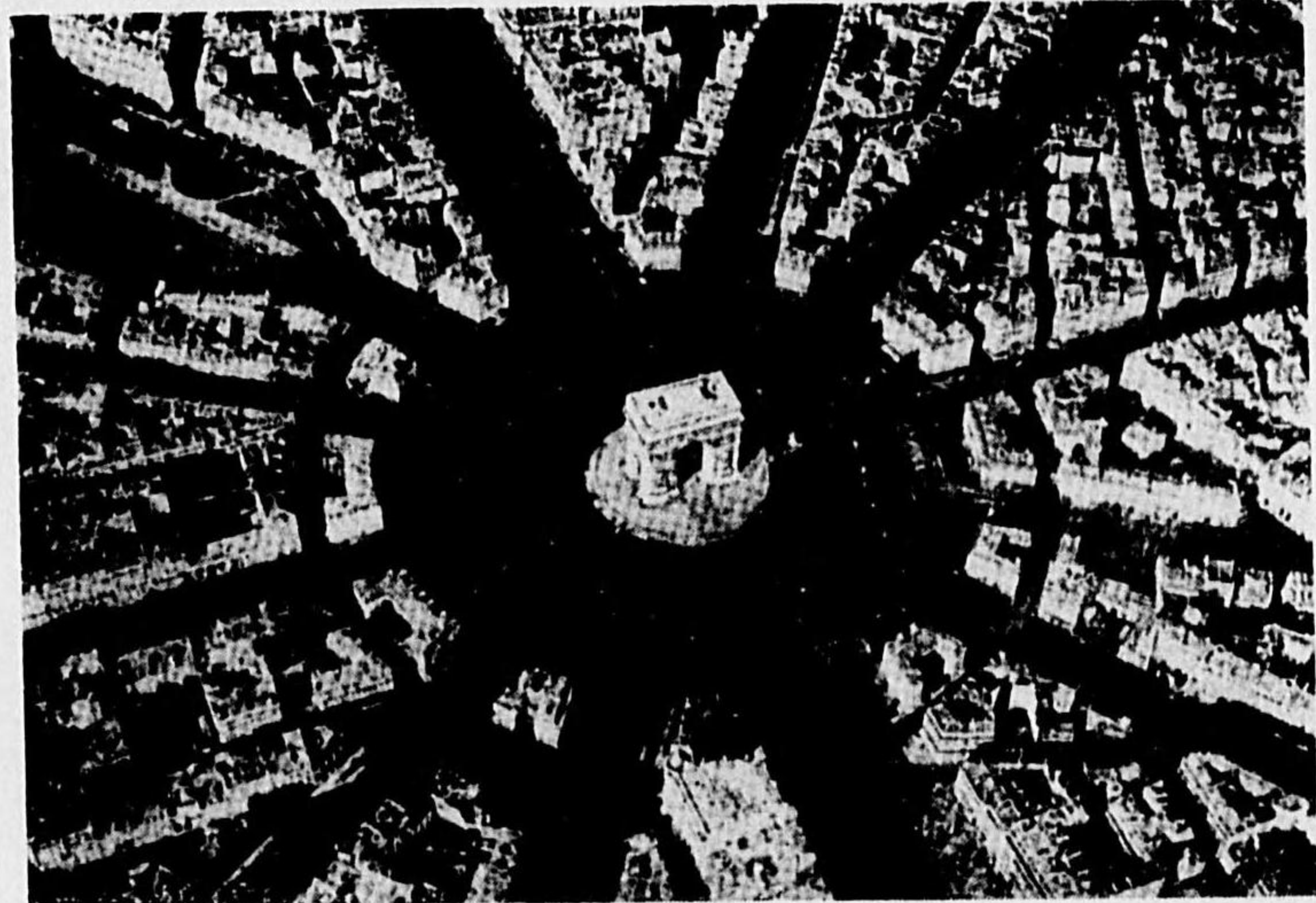
亡びゆくニューヨーク (7頁参照)



序

古來一つの民族が旺盛な発展を示すときには、よかれ悪しかれかならず何等か都市の新しい型を創造する。ローマ人は今日なほボンベイに見るところのローマ植民都市を歐洲全面に散布した。精悍無比な元の人達は長驅のままに、北京に面影をとどめる都市型を沙漠のかなたこなたに建設した。中世獨逸人は敬虔にして親しき廣場都市をライン河に沿うて點綴した。マホメットにひきおられたサラセン民族は、怪奇に近き迷路都市をコーランの赴くままにスペインの中心部にまで潜入せしめた。

いまわれわれの屬する日本民族は、肇國以來の大飛躍を遂げんとしてゐる。おそらく歴史の約束に従つて新しい日本型の都市は全日本に、大陸に、南に、



パリ 凱旋門 (170 頁参照)

北に創造されることと思ふ。後世に對しわれわれの世代を誇るに足るだけの會心のものが考へ出されてほしいと冀はざるを得ない。

さうして具體的にこれらの出生育成を強力ならしめるものに、國土計畫がある。いま國土計畫は、大都市を疎散し地方に健全な中小都市を造ることに渾身の努力をはらつてゐる。また、國土計畫は、都市に對して根本的に新しき形態を採ることをも要請してゐる。急速に爽快な時が來さうである。

ただかうした場合、「よき結果」を得るために必要とされるのは、單なる技術家の力量といふがごときもののみではない。一番重要なことは、國民全部が都市創造に興味をもつことである。その温床のなかに初めて卓抜にして合理極まる都市が生れ得、育ち得るのである。すなはち、今日以來「指導民族日本人」の一つの資格として、自から「都市に對する興味を有つこと」がつけ加へられなければならぬことになつたわけである。

この片著は自分の二十年にあまる都市計畫生活の工房覺書である。

この途や先人あるなく、われわれ日本の都市計畫技術者はただ一刀一拜に代ふるに一劃一考、縷心の難路を歩むより仕方がなかつた。その成果の如何は別として、考察のノートは今や丈餘をなし（いづこの工房に於ても）、それは何か一つの技術的な「時代の歩み」を物語らんとしてゐるやうに思はれる。これはそれらの中の一握にすぎない。

然しそれにしても、自分はこの中に於てさへすでに何か都市の體臭・體温を感じ得るやうな氣がするのである。さうしてむしろ案外かうしたものの方が、世人の都市に對する興味の發足に役立つのではないかといふ自負をさへ生ずるに至つた。それが今日この著をなさしめた理由なのである。

最後に、この書の刊行をおすすめていただいた土岐善麿氏及び香原一勢氏に厚き謝意を表したい。

昭和十七年十月

阿伎工房に於て

著

者

目次

百年後の都市……………一

南方都市計畫への提言……………三二

大東京の構想……………四六

都市人口増加率を支配するもの……………一〇六

郷土都市を造る……………一四〇

都市の味……………一五八

盛り場風土記……………二一八

後書……………三九七

都市の生態

百年後の都市

と断りするまでもなく、この百年後と云ふのは、數字上の百年後と云ふわけではない。云はば、我々の想像力が達し得る最も遠い将来、と云ふ意味である。

夢見る人

自分が最も不思議に思ふのは、世人は服装や建築のやうな手近なものについてはあまり将来に夢を有たうとしないにもかかはらず、物好きにも都市などと云ふてんで手も足も出ないやうなものについてよく夢を見たがると云ふことである。

しからは、それが「都市とは何であるか」とか「都市計画と云ふものはどんなものか」について一應の知識があつての上かと云ふに、勿論そんなものには一向振りむいて見たことがない。實に我々にとつてこれは興味のある現象の一つであるが、同時に我々都市計画をやるものにとつてまことに有難き「現象」でもあるのである。何となれば、この小さな窓「將來の都市」こそは實に「現在都市の省察」、従つて「都市計画」への入口であるからである。

とまれこの都市の夢は我々の中に於ても當然の興味の對象で、過去何百年、實におびただしい夢が見られて來た。特にそれは十八九世紀の工業戰國時代以後、都市が急激に膨脹してから、その夢が具體性を帯びて來た。有名なロバート・オーウエンの理想村やハーワードの田園都市などその優秀なものであるが、その中ハーワードの田園都市はつひに實を結び、現實に二つの田園都市を地上に印し、その思想は今日の都市計畫の指導原理になつてゐる。

今これ等の「見られたる夢」の多くを検すると、そこに二つの流れがあるこ

とが感ぜられる。その一つは云ふまでもなくメトロポリタンへの憧れであり、他の一つは小都市論、即ち農村生活への郷愁である（ハーワードもオーウエンもそれ）。

恐らくこれを難しく論ずるならば、前者は資本主義的なものであり後者はその逆の陣營の希望であるとも云ふのであらう。そして云ふまでもなく、そのいづれにも浪漫的なものがあり、これが多分に議論を行き過ぎさせてゐる形跡が見えないでもない。

しかもなほ自分は浪漫のベールを透して、そこに都市の歴史的発展が存外に正しく正道を歩いてゐる覺音をも感じ得るのである。

それ等の幾つかを述べて、讀者の結ぶべき新しき「夢」の材料に資したいと思ふのである。それにしてもその前に一應「夢見る人達」の「夢」に敬意を表する必要があらう。

まづメトロポリタニスト。これは名をあげて云々する性質のものではないやうである。滔々と流れる人口の流を併呑し、いやが上に盛り上るメトロポリタン。そこに住む市民は絶えず「百萬」「四百萬」「一千萬」と人口のパロメータを誇りがに數へ叫んでゐる。その「四百萬」「一千萬」が人類の幸福の何を示すかを知らうともしないで。尤も「その人口量の及ぼす害について、眉をひそめてゐる」と自稱する人達だとて、果してその何人が眞に眉をひそめてゐるだらうか。俗語のいはゆる「トカナントカ云ひながら」、結局彼等「先覺者」と雖も又腹の中では「四百萬」「一千萬」が御意に召してゐるのである。

現にそれ程嫌なら、大都市をはなれて田舎へ歸ればいいではないか。結局、大都市に住む者は、そのサイレンの魅力に融けてゐる。そして一齊に口を揃へて「百萬」「千萬」と明日を謳歌してゐる。さうして大都市自體は、盲ひたる

市民の謳歌に拍車をかけられて、高層建築を天に摩せしめ甍の海を十キロ二十キロの半徑の外にまで溢れさせて行くやうに見える。然し果して、かくの如く彼等の無限大都市は實現されるのであらうか。

この時まづ疑問符を投げるものは交通機關である。冷徹なる科學が遮斷機を降さうとしてゐる。勝手に無限大都市をねらふがいい。然しこれを結ぶ交通機關をどうするか。現在のままの交通施設で千萬二千萬の都市を賄ひ得る筈がない。そこで當然電車のない飛行機時代などと云ふものを考へに入れて、大衆の夢はいつもメトロポリタンの交通構造に興味を集中する。

さうしてその夢の對象としていつもニューヨークが選ばれるのは、あの摩天都市の有つ典型的なメトロポリタンの景觀の故であらう。そのニューヨークの將來として一九一一年に描かれたものがある。飛行機がいかに一九一一年的であるかは別として、實に豪華な世界であるが、それにしても何となく「世界の終」を思はしめるものがあるのは何故であるか。殊にダイオゼニスではないが、

「人間は一たいどこに生きてゐるか」と白晝燈によつて探すなら變な悲しさが先立つのである。

また中央驛に對する夢もある。尤もこれは大して頭の好さを示してはゐない。ニューヨークの道路について、ニューヨーク地方計畫委員會が具體的に提案した。この方が餘程、我等に「將來」を暗示する。

然し何れにせよ、かうした案（或ひは夢）はこの都市構築の要素たる市民の自由なる行爲を抑制し得ないものとしてゐる。いはば過多自由主義をはぐくみ甘やかす夢である。

ここに當然「たとへ大都市がそれ程いいにしても、ニューヨーク型の複刻は何としても賢くない」と云ふ派があり得る。

即ち「ニューヨークでいい」「然しこれに空氣と日光を入れ自動車を走り好くせよ」と云ふ「應男らしき主張。この選手が佛人コルビジエーである。彼の「かくあるべきバリ」は人口三百萬、中心部に一〇〇萬坪の大空地がある。その中に、十六階七〇〇尺と云ふ摩天閣が二十四本建つてゐる。その摩天閣はみな平面か十字型で（その爲にどの室にも日光が入る）、摩天閣同志の距離は一キロづつ離れてゐる。

この摩天閣のある大空地の中央が交通中心で、地上三階地下三階になつてゐる。地上の最上部が入萬坪の飛行場、二階が高速度道路、三階が中央驛、地下が地下鐵道と云つたやうな交通百貨店である。これが後に空襲價値を云々されてかなり評判になつた。

小都市論者

しかし何としてもメトロポリタンにはどこかに無理がある。美しい山村を見、穏やかな農村を訪れ、典雅な小都市に住んで見ると——少くもあの交通機關の轟音や「晝でも燈の要る家々」の層々の累積は省みさせられる。そこで、都市計畫の正統派と稱せられる小都市論者が、大都市時代十八九世紀のさ中に既に

輩出した。

ハワードは、その代表者として「ソロモンの榮華の極だにも及ばざる野の白百合」なる名著「明日の田園都市」を世に問うた。これが先に云うたやうに現代都市計畫の——古典ではあるが——哲學となつたのである。時は正に一九〇〇年、今世紀の空濃紺なる曉である。

・田園都市論は、當時の社會人の常識を強打した。即ち彼の田園都市は人口を三萬に限るとか、その都市には必ず市民が働くだけの工場がなければならぬとか、瓦斯、電気はすべて自市經營たるべしとか、都市の周圍には永久に農業地帯が保留されるとか——最後に土地は公共有たるべしといふ風に——嚴しく規定される。かういふ都市を無數に大ロンドンの隣接地に造り、ロンドンに集中する人口を食ひ止めようと云ふのである。理論は好かつたが、結局餘り嚴であることからこの規定に合格する都市（即ち眞正の田園都市）は今日四十年間にロンドン郊外に二つしか出来なかつた。

また、結局彼の最も強き主張たる都市の人口を三萬に限るといふことは（これは後に五萬までゆるめられて）、やがて一つの都市の理想人口の標準になつてしまひ、そして「世界の都市を人口五萬——三萬に分散せよ」といふ叫びとなつて都市計畫界を支配したとは云へ、そんなものを一つ二つこしらへたのではない。即ち、勇いくら何でも四百萬（當時）のロンドンをどう出来るものではない。即ち、勇ましいけれどもどこかに空な響きがあつた。そこで何事も實用的なアメリカ人のテイラーと云ふ人が衛星都市論でこれを修正した。即ち母都は母都とし、母都のまはりの都市を田園都市風に修正してゆく、これが實現性ある大都市の理想形式だといふのである。ともかく、ハワードの曉鐘により、今世紀は誠に小都市論でなければ夜も日もあけない時代となつた。

最近に於て、ドイツのゴットフリード教授は人口二萬の都市の定型を示した。彼はこの中に市民の職業構成をきめるのみか、市民の「毎日の生活の中心」「一周一回の中心」「一月一回の中心」を生活中心とさめ、それを分散し系統だて

てゐる。

しかるにかうした小都市論の横軸の方からまことに怪異な都市形式が顯はれた。それは帶狀都市と稱するもので、都市の形を帶狀に組まんとするのである。そしてそれは何事も突飛なスペイン人（ピカソとカルメンを産んだ）の手によりマドリッド近郊に一八八二年といふ早さに於て、長さ二二キロ、幅は數十メートルの細長い都市として現はれた。

提案者はドン アルツロ ソリアリ ナタといふ貴族であり、その發明の主旨も明瞭でないが、とにかく朗かなものが云ひ出され、また朗かに實現されてしまつたものである。

そしてこれが何としたことか、ただ「朗か」であることから脱却して四十年後の一九三一年ソ聯の國土計畫の都市形式として採用されることになつてしまつた。尤もそれはマドリッドのやうな暢氣なものでなく、はるかに理論的に改良されたものではあるが、ともかく、これが防空上、工業能率上、保健上最上の

形式と認められるに至つたのだから全く「解らないもの」である。

夢の誤謬

かくして「百年後の都市はどうなる」に對する答は多い。そのいづれもが眞面目に考へられ提案せられ、また明日を主張してゐる。これ等の夢の中最も正しいものが明日を語つてゐるわけである。

しからば、そのいづれがそれであるか。あまりにも異なるこのどの夢が眞実なのか。自分は「そのいづれでもなく」又「そのいづれでもある」と云ふ。その理由は、先に云うた様に、このどの夢にも疑問があり、どの夢にも眞があるからである。

疑問の一つとしては、たとへ大都市が困つたものであることが公理に近いとしても、果して小都市の價值がそれほど高いだらうか——といふことである。

少くも我々は、農村や人口二三萬の弱小都市の退屈極まる（設備に於て、變

化に於て)生活を理想と考へるわけにはゆかない。これについては真正直にソ聯(いかやうとも思ふままに實行し得る彼等にして)が云つてゐる。即ち人口二萬や三萬の都市ではろくな施設も出来ないし、市民の社會的訓練も十分でない。都市の人口は最小十萬だと云ふのである。

誰にしても世界中が人口二萬の寒々しい都市生活に分散されることは、何としても想像したくないに違ひない。小都市論の中には多分に都會人の農人生活讚美同様、無責任な感傷主義と農村への阿諛があるやうに思はれる。

しからは、小都市は不可であるか。勿論そんなことが云へるものでない。農村に近く、日光豊かに空氣の淨い、そして又人情敦厚であり得る小都市が、何で否定されよう。

又逆に、一方の大都市は「悪魔」と呼ばれつつ、實は死亡率が小都市よりはるかに低く(都市年鑑を見よ)、しかも施設は經濟に於て、文化に於て、公共施設に於て、時代の蓋なのである。

即ち、ここにそれぞれの價値を抽出すれば、「文化に於て大都市」「人命(及び國防)に於て小都市」となるのもあらうか。

さうすれば「人間は果して文化と人命の何れによつて眞に生くべきであらうか。」それによつてこの二つの夢のいづれかを採らなければならぬことになる。

これはけだし難問となつた。

明日の都市

しかし、自分はこの難問に簡単な答があると思つてゐる。この二つの目的をかねて、——従つてここに「大小都市」と云つたやうなものが存在し得ると思ふ。

勿論生命論に基礎づけられた小都市論が考への出發點となるべきことは、疑ないが、問題は、いかにしてこれに「大都市」の文化價値をあたへるか——である。

その方法を簡単に種を明かしてしまふならば——今ここに大東京があるとする。これを取巻いて五十キロの半径を考へる（川越、千葉の圓）。大東京七百萬（横濱を入れて）の人口をこの中にばら撒く。舊市内などもどしどし農業地乃至大公園で穴を開け、舊市内を人口十萬の都市一〇位にしてしまふ。そして押し出された人口を川越や、岩槻や、相模原へそれぞれ人口十萬位づつ割當てる。尤もそのままでは困るから、お互ひの連絡や、都心への交通機關を十二分に整備し、どこへ行くのも十錢以内。そして端から端へ最大一時間以内で行けるやうにする。かうすれば、この五十キロ（五十キロと云ふのが現在我々の夢として精々一時間で結び得る大きさ）の中は、現在の大東京の價値を少しも損ずることなく、しかも小都市群の構造でゆける。勿論、この場合、この各小都市の間の空隙は必ず農村なり公園なりにして置かなければならない。これでいい。これが「大小都市」の答である。讀者はここまで来て物々しい物の云ひ方に拘らず、何となく平凡でしかも出來さうもない「夢」に落されたことを不快に思

はれるかも知れない。然し不快感をおもちにならうとなるまいと、これが今の世界の都市計畫の底流であり、しかも氷河の流の如く強力な壓力により、ぢぢりぢりとして押し流されてゐる方向なのだから仕方がない。

その實踐的規範となつてゐるドイツの國土計畫は國防上、國民保健上、大都市の存在を許さない。彼等はひたすら農村を育て、小都市をはぐくみ、市民は必ず少くも半農民たるべき規格のもとに、全國土の計畫が進められ、世界の範となつてゐる。彼等の國に於ては、都京計畫も農村計畫も、ただこの國土計畫の一楔子としてのみ存在し得てゐる。さうして然るがために「大都市は分散せよ」となつてゐる。この國土計畫主義は經濟形態が「自由放任から計畫經濟へ」赴くのが必要であり、理論的である」とするなら、當然の歸結である。ただドイツの案の缺けたと見られる點は「大都市の價値の回復」が考へられてゐるか否かと云ふことである。横紙破りの我がまま者なるソ聯でさへ、「小都市至上は疑問」だとして、十萬二十萬の都市を擧げ、モスコウは六百萬の都市として計

畫してゐる。この點ナチスに行き過ぎがないか。我等の考へる東京改造の夢の方が一步前進だと一應自負せしめられる所以である。

然らば問題は、例へば關東平野の北部のやうなところや、九州南部のやうな所をどうするか。まさかにもうここまで東京と——或は北九州と關結されもしない。又さうする必要もない。そこで容赦なくその大面積の上に新しき五十キロの「地方」を造るがいい。その中の都市を縦横に緊密に聯結する。さうしてその中のある都市が銀座で、一つの都市が淺草で、他の一つが本郷で、またその他が深川であり等々と分化する（これは決して各都市の自由にせしめない）。又ゴットフリードのひそみにならへば、それぞれの都市は日常生活の中心を有し、ある都市は他の都市の「月の生活」の中心となり、或は「週の生活の中心」ともなるやう分化し得る。さうしてどの都市も決して十萬乃至二十萬より大たり得ず、各都市の間には永久の農地が保留される。これでいいではないか。この方が大東京より出來易く、大東京より優れたものになり得る。自分は特にこの

後者の五十キロの「地方」こそ百年後の都市だと考へてゐる。

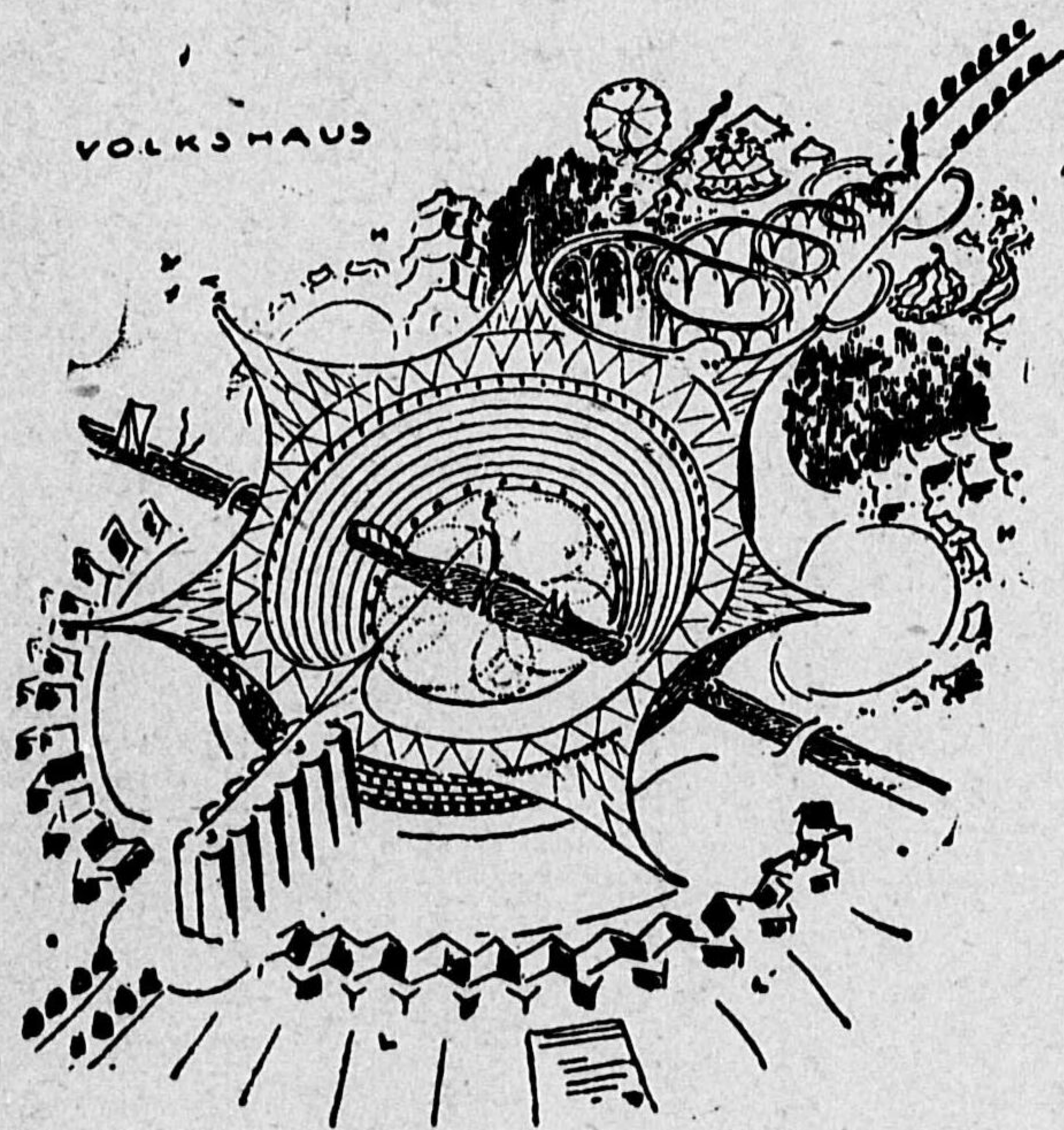
今日の地方計畫はここまで意識を明瞭にしてゐないが、臆げにこれを計畫してゐる。自分は、この最後のものは既に「地方」などと云ふあいまいな、ばらばらなものではないと考へる。國土全體の生産組織の上に劃出された厚生生活の單位だと考へる。都市でもなく村でもなく、都市と村の融合せるもの、強ひて文字を探すなら「郷」であり、郷こそは百年後の都市の相である——と自分は考へる。

何と摩天都市と對蹠的な都市景觀の約束であらうか。

國防都市

これで主題の答を了へたわけであるが、ここに今現在我々の問題としてゐる國防都市と云ふものがある。これについても一顧して置かう。

國防都市として最も重點を置くのは空襲に對する備へであらう。これに對し



これに土壤を乗せ「屋上畑」とする案に飛躍する（尤もそのためには建物は皆

帯状都市論、小都市論、
殊に自分の機能分散式
の地方計画は總ての答
をなすものであり、ま
た手より口への問題と
しては不燃都市、地下
防護室などと云ふ工夫
も考へられてゐる。

コンクリートでなければならぬ。かくすれば、耕地は減らず、市民は直ちに
農地に出ることができ、建物は又空からは見えない。この案を何故——少くも
夢としてでも——人々は興味をもたないのか。恐らく、この案を省みなかつた
ことが現代人の唯一の後世への譏りとなるのではないか——などとひそかに自
讃する次第である。

讀者よ。賢明なる讀者も亦世人と同じひそみにならばんとするか。呵々。

（附。このタウトの圖面は、かつて日本をおとづれ、日本の都市計畫家を指し
て官僚獨善にして都市計畫を知らざるものと笑つて歸つたブルーノ タウトの
夢である。然しどうもこの程度では、カユくないやうである。線と色と思ひ付
きの中から都市の夢は出ない。都市は生産の機構を土壤として咲く花である。
日本の官僚は、造花を造つて手を叩く無邪氣さがないのが難であると答へて置
かう。）

南方都市計畫への提言

都市計畫研究所の必要

大東亞戦争が建設期に入つて見て、世人は初めて都市計畫がいかにもその建設的具體面の重心にあるかに氣付いたことであらう。いかに國土計畫を巧みに論じ盡して見た所で、結局その最後の表出は都市農村計畫のいづれかでなければならぬ。又、結局に於て一種のロマンチストに過ぎない都市否定論者も、地上文化が謂ふ所の農村聚落の散布のみによつては、いかにこれを組結しやうもないことが解つたことと思ふ（結局に於て都市否定論者は、風紀恐怖症より偏して女子否定論になつたものと同様の範疇に住する）。

空論跋扈時代には歩の悪い——そして建設時代に於ては先頭を切るのが常に都市計畫なのである。ただ然しそれならば、日本の都市計畫に、今までこのやうに晴がましい時代に、その呼び聲に應じて起つだけの準備があつたかどうかとなると、それは別問題になる。

都市計畫は都市土木工學でもなければ、都市建築學——精々綜合綠地計畫——でも何でも無い。況やそれは行政常識の應用問題と云つたやうな他愛のないものではない。都市計畫はあくまで都市と云ふ現象體（それは社會學、經濟學、國防科學等の綜合對象であるべき）の計畫である。従つてそれは都市現象學の専門家に屬する技術でなければならぬ。その様な専門家が育成されてゐたであらうか。恐らくこれは日本のみならず世界に於ても「未だ」であらう（區々たる人口論程度では問題にならないし、地理學は又餘りに淺き間口である）。

正確なる學問のない分野に何で信念が生じよう。信念のない所に、よい成果の期待出來ようはずがないではないか。しかも最も困つたことには——。問題

が今までのやうな自由主義時代のこと、その目圖とする所が「豊かなる文化」であり、その完成に長き世代をかけることを惜しまないと云ふ様な場合ならば、都市計畫に多少のムカリがあり、それが天衣無縫に近き無方針であらうとも、それ等については長き世紀が修正に修正を加へ、餘剰を削り不足を補ひ誤りを匡正し、やがて回顧すれば結局人生一路が坦々と描かれてあつたのを驚くと云ふ段取りを採る方法もある。

しかし、今世界の國家、特に日本としてはその成果を後世にかけ、しかもその成果は國家のあづかり知らざる所などと云ふのんきなことを云つてゐる場合でない。今や、國家の求むる所は一點であり、それは急遽達成を要する。さうなると方法論は益々窮屈になつて來るばかりである。既往の如き學問では急の間には合はず、方法論は自由主義的であり得ない。

——かかる場合いかに處置すべきか。

結局に於て、何としても都市計畫研究所の官設は強調されなければならぬ。

そしてそれが堂々たる體制を得るまでは、總ての都市計畫機關の職場を以て都市計畫研究所の分室となし、これに國家の要請を明示してその研究成果を統合する形式より仕方がない。そして同時に少くも技術陣營は既往の安易な態度を切りすて、「愁によつてかくの如く白し」の心境に心をひそめ、邁進する「良心」の覺醒をなさなければならぬ。これ以外に方法はないと考へられる。

大東亞經營の課題

以上の如く大東亞の建設部門に於ける都市計畫は、その問題の提起に於てさへ慎重なるものを必要とするのであるが、——しかし一方我々は目前に於て、焦眉の問題及びおぼろ氣ながら望見し得る問題のあることに氣づき得るのである。例へば我々は既往に於てあまり風土との關係を都市計畫部門に取り入れる必要がなかつた。勿論臺灣の都市計畫と北滿の都市計畫に於ては、自から風土の反映がなかつたとは云へないが、それは何にしてもさして歴然たるものであ

つたとは云へない。

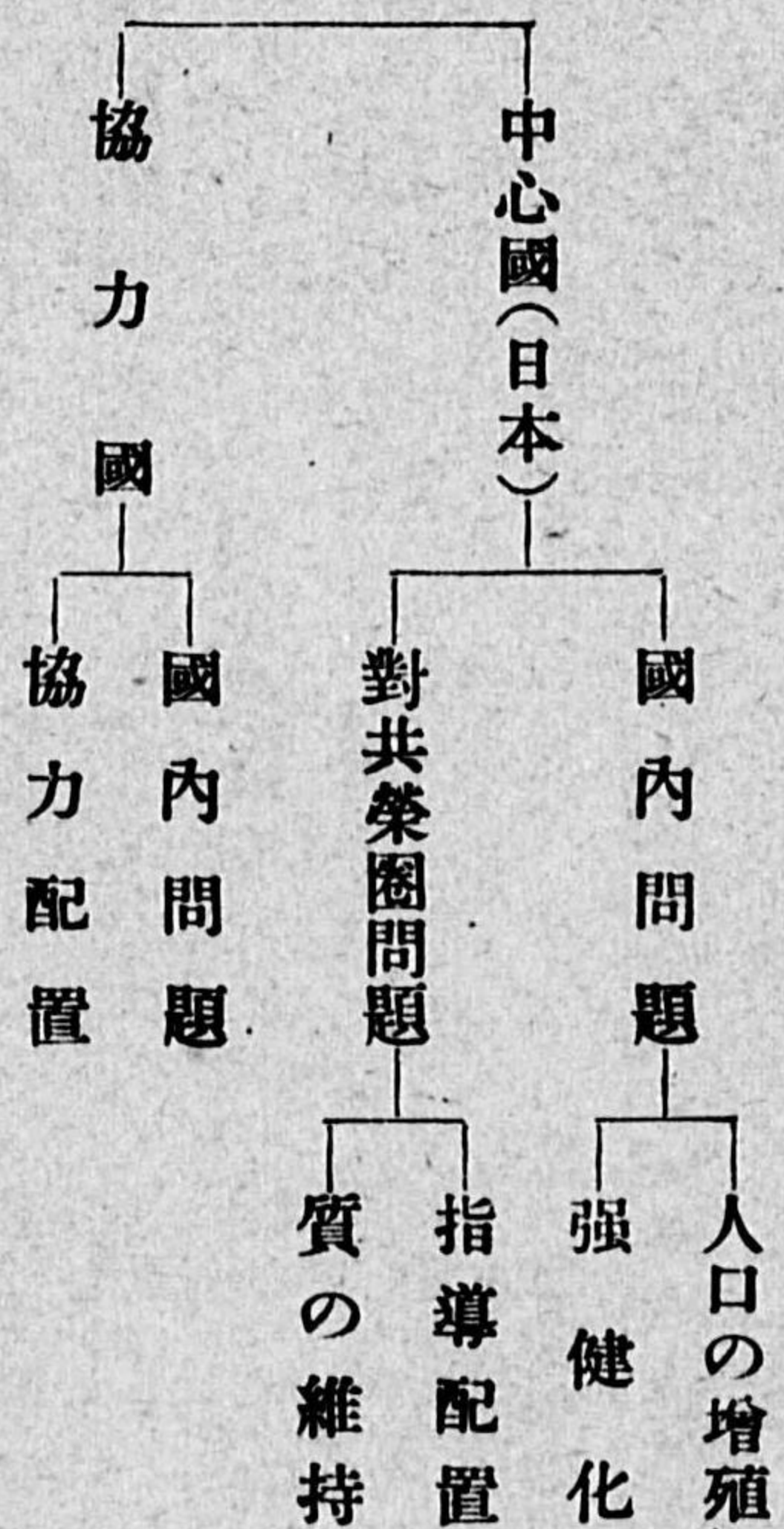
しかし我々は、印度アラビアを中心とする赤道都市が、いかに濠洲南部乃至シベリヤ都市と異なるものであるかを観察する時、太平洋共榮圈の上の都市に對する我々の態度がもつと幅のあるものであるべきやうな氣がする。

我々は臺中の都市計畫が（現在の技術陣によつたのではない）僅に道路方角をあやまつた爲に酷熱住むにたへないものとなつてゐることを知つてをり、北海道の二三の都市に（これも今の都市計畫陣によるものではない）凜烈たる北風をいかに冒して進むべきかの術なき路幅路系を見出す。

風土はまことに和辻博士の云ふ如く我々の生活前提である。それは櫻咲く日本諸島の中での場合には大した問題でなかつたが、北極より南極に汎る圈を考へる場合、大いなる關心を必要とするのである。

問題の第二として自分は民族問題をあげる（これは國家的要請でもある）。今日に於ける民族問題は、國土計畫の指導原理になつて來てゐる。

かつては、單なる兵力補充策として考へられた人口論が、いつしか大東亞の構成技術としての民族問題にまでなつた。即ち量は質の問題に轉移したのである。例へば民族問題は、嘗ては單に人口の増殖、及びその強健化を課題としたのであるが、今や我々は、これを



と云ふやうに考へなければならぬ。その中今まで最も開却されてをり、今日最も重要事となつたのは、恐らく中心國問題としての「指導的配置」及び協力國の「協力的配置」の技術であらうと思はれる。

民族の身質は固より重要であるが、單なる工業繁榮策では意味を成さず、今日の工業政策は必ず人口問題を考へに入れる必要がある。又單なる人口問題と云ふ様なものもあり得ない。それは必ず民族國家確立を目圖とするものでなければならぬ。そこに風土技術を見かへりつつ、指導的配置又は協力的配置の唇齒輔車構成を敢行する必要があるのである。

第三の課題は（これも國家要請）國防施策である。世界秩序戦に當面してゐる時、防備なき國土現象は意味をなさぬ。或は數世紀を過ぎて顧みればそれは尾骶骨的存在となるかも知れぬが、少くもここ數十年の間、世界の文化は「國防文化」に終始しよう。それは日常文化プラス國防技術に非ずして、國防と云ふ新しき文化の新しき各相を見出すことになるのである。それは誠に龜がその甲によつて美しさを創造してゐるのと同意義を有つのである（甲なき龜は見るにたへぬものであらうし、甲を必要とせぬ時代となつたら、龜は又新しき生態を案出しなければならぬ）。

今や我々の都市も村も國土も共榮圏もあらゆるものが装甲されなければなら

ないのである。

以上氣づくままに課題をならべてみたが、恐らくこの外にもなほ幾多の問題があらう。それ等が併せて都市に「服する事」を求めるのである。

主として南方都市への提案

何にしても我々は東亞——特に風土的に打克ち難き困難を有つ南方都市が、圖案的な興味に墮したり、母國複刻（英米佛和等の試みたる如き）に終ることを最も恐れる。それは研究所分室的氣魄により、精緻なる計畫によつて着手されなければならぬ。そして少くも上記の如き、風土、民族、國防の如き大題目を解決する様なものでなければならぬと思ふ。

それについてさしづめ「復興」の問題もあるので、これも頗る思ひつきに類するが次の様な提案をして見たいと思ふのである。

- 一、都市の大きさは人口二十萬以下位とすべし。
- 二、出来るだけ各都市は單能化すべし。
- 三、都市群は五十軒位を一つの圏とし、中心都市と緊密なる連絡あるべし。
- 四、都市相互を連繫すべき道路は必ず各都市の外邊を通過し、各都市とは取り附道路により連絡すべし。
- 五、各都市の一般的な構造條件。
 - イ、日本人區と他民族區を分つこと。
 - ロ、日本人區には必ず神社を設置する。
 - ハ、兩區の間に政治中心を設け、指導精神を表象する形式たらしめること。
(公館の建築様式をして指導的なものたらしめ、これに廣場を附帶せしめる)
 - ニ、兩區の間に盛り場的な區域を設け、交歓生活に資する。
 - ホ、都市の周圍を空地多き施設帯にて限る。例へば運動場、その他の如き。
 - ヘ、可能なる場合には水邊綠地及び展望臺を設ける。

ト、市内交通機關はこれ無きを理想とし、道路構は縦横構とす。但しその一軸は恒風に沿はしめる。

チ、土地及び道路に地域制を設くべし。

都市の大きさを人口二十萬以下とするのは、第一に民族の健康、第二には巨大都市による市民心の國際化乃至妄動化を防ぐのである。——と云ふよりは、「小都市効果」により市民心を「指導理念」の旗のもとに結合し易からしめるのである。これについては今更新しき説明を要すまい。但し小都市効果は都市が極小化すると再度消失する。これは獨逸、蘇聯兩國土計畫の主張する所でもあるし、又防空上の施設能力も一定限度の人口量を要する。

その兩限界の交る所が人口二十萬位とする。勿論これは地方中心都市で、この下に人口二萬位の一聯の都市があつてもよく、又この上に國中心として人口五十萬位までは許容され得る（小都市なる時市民心は農業と結びつき得、且災害時に直に田圃を避難し得ると云ふことである）。

又これ等の都市は當然相互に一つの組織を成してゐることが必要であり、その圏は大體地方計畫の前例に見るも五十キロ位が適當である。この圏内の都市が中心都市の一絲亂れざる統制下にあることは文化の濃度を増す所以であり、又指導力を普遍的ならしめ得る手段でもある。

さうしてこの際各都市が出来ただけ單能（工業都市なら工業だけ、軍港なら軍港だけと云ふ風に）であることは、人口を過度に集中せしめざるのみならず、空襲價値を減退せしめる。

又、この圏内連絡の交通機關は當然自動車國道の如きものとなるであらうが、それは決して都市中央を通過せしめてはならない。市中をして「市中」たらしめる爲にも、防空上の問題よりしても、これはナチスの云ふ如く外側通過でなければならぬ。

都市内の構造としては、民族問題上雜婚の餘弊乃至二世現象をさける爲に、何としても日本人區離設の必要がある。これは一應「水くさき」ものを感じし

めるが、然し共榮圏構成は何としても一つの技術であり、そこには必ず「強力なる主盟」が確立してゐる必要がある。日本人が日本人たる本質を失つた時、共榮圏も亦存在し得ない。その意味でこの「水くさき」は容認してかからなければならぬ。

さうしてその日本人區域は必ず、共榮圏原理としての皇道哲學により指導されてゐなければならぬ。いはばそれは皇道哲學の道場である必要がある。その爲に必ずその重心部に神社を設ける必要がある。そしてその拜殿は日本を背にする形とする必要があるが、その社殿形式は必ずしも純古式にのつとるより、附近の山河と調和するやう變改あるべきものと考へられる。

ただここに重要なのは境内で、神社は結局に於て社殿そのものより、一つの聖域としての價値體である。従つて重要なのは環境である。境内は十二分の廣さに亘つて取るを要する。又その苑致は——必ずその地方特有の樹趣にて、こだはりなき形式のものたらしめる必要がある。要は——皇道精神が固萎に墮す

ることなく、風土に従ひ自由發展する形を表象せしめる必要があるのである。

かく日本區を確立した上は、他區との間の聯繫が圓滑に行はれてゐなければならぬ。その方法の一つは指導的な施設の集設で、例へば政治中心廳及び日本文化の精華の展覽場及びその郷土の文化の教導施設等を都市美的に配列する。そしてその中心に廣場を設け、政治的催事の全市民集合場とする。

又、他の一つは慰樂中心で、娛樂機關を集中せしめ談笑裡の交歡を爲さしめる。即ち盛り場の施設である。

都市中心部の一應の整備が終れば、都市周圍を空地で限る必要がある。それは綠地帯處理であるが、それは必ずしも農地である必要なく、運動場等を綜合した方が二利ある。

かくして市中の交通構成となるのであるが、自分がかかる小都市は南方に於ては出来るだけ縦横型たらしむべしと考へる。毒ガスの通風の爲にも、涼風享受の爲にも、恒風にそはしめた道路は縦横型が理想的なりと考へる。しかしして

亦最も望ましきは、それ等の道路の水邊綠地への連絡である。これについては次章印度の都市計畫が解説してゐる。

また、この都市の市民が定着するに足る生産が必要であるが、その爲には當然工業地域が準備されなければならない。そして最後に自分の云ひたいのは土地の地域制と共に、街路についてもそれぞれの街路の用途を定め、その用途に應ずる保護、整備を與へることである。例へば住宅街、商店街、工場街、官公街等はそれぞれその特有の使命により都市美的に、交通的に、独自の扱ひを爲すべきと考へる。道路ある所必ず街樹あり、街樹ある所必ず自動車走ると云ふ如き無軌的な扱ひはこれを一轉期として解消せしむべきであると考へる。

——以上、頗る粗雑な提案であり、固より自分の意の總てを盡してゐない。ただ、自分は一應この程度の考慮だけでも風土、民族、國防の大題目の七、八分の目的を併せ遂げ得ると考へる。そして「復興」「百萬都市」「圖案主義」が國家百年と云はず即刻の大害たるを存分に知るがままに、あへて異を稱ふる

に似た説を爲し、注意を求めて見たのである。

印度の都市計畫より

以上、試説をのべるに際し、自分は印度の都市計畫から多くの示唆を得てゐる。よつてそれ等について一應の紹介を試みよう。

印度の都市は大體印度傳來の都市と歐洲植民都市とに分ち得る。

印度傳來の大都市はアグラ、デリー、ラホール、ベナレス等であり、植民大都市はマドラス、カルカッタ、ボムベイ等である。植民都市としてはこれ等に附帶して夏期都市、シムラ、ダージリン等がある。

印度傳來の都市に二つの形式がある。圍廓のあるものとなないものである。

前者はデリー、ラホール、後者はアグラ、ベナレスであるが、この中デリー、ラホール、アグラはそれぞれ廓の有無は別として堡壘を別に有つてゐるが、聖都ベナレスにはそれさへ完全でない。しかしてこれ等の都市の道路は完全に迷

路である。

歐洲系都市は總て同型で

堡壘あり、

圍廓なし、

道路は縦横型（但し必ずしも整然ではない）

となつてゐる。

以上は現實のしかも大都市の外形であるが、興味深きはかかる現實の都市を有つに至つた彼等の眞の夢である。恐らくそれは村落に始り、中小都市に至る都市の理想構造であらうか。マドラスの都市計畫報告書は、都市計畫の理想として次の様なものを有つてゐるとしてゐる。

Manasara Silpasātra の説。

——村落を立地せしめるには、まづその位置と地質を吟味しなくてはならない。

地相として最も好まじきものは東面の緩傾斜である。さういふ傾斜は太陽の曙光を一面にあびることが出来る。この價值は、印度で庭園をあつかつたものならすぐ解る。

そこからその土地に近く左から右に向つて川が流れてゐる必要がある。それは丁度太陽の一日のコースである。又、地下水が七尺位の所にあることも條件である。

地質を調べる簡単な方法は一ハスタ位掘つて、掘つた上を柔くほぐし、それを又埋め返して置く。それがいつまでも盛り上つてゐれば最上、レベルになれば中位、へこんだら下位の土地だと判断する。

つづいて日時計によつて基點がきめられ、それから村の幹線が引かれる。

大きな村ならば、まづ中心に魔術の廣場と云はれる廣い交叉點が造られる。この形は宇宙の四方にわたられるのであるが、それから總ての道路が配置せられる。

尤も讀者はこんなことによつて印度人が非實用的な形式的な民族だと思つてはならない。これは皆それぞれ實際上の効用があつてやつてゐることなのである。

これに限らず、印度では總てが實に魔術的であるが、これもよく考へて見れば結局長い歴史を経た經驗が土臺となつてゐるので、魔術らしい扱ひはそれの紛飾にすぎない。

例へば此の場合でも、これ等のしかつめらしい魔術も結局、保健、快適等々の生活條件を考へてのことなのである。例へばこの中心から東西南北に幹線が走るわけであるが、東西の道路は太陽が朝から晩迄照らし淨化することが出来る。又南北の道路は換氣をよくし、特に冷やかな微風を通はせることが出来る。

この東西南北の幹線は相當の幅員を有し、概ね影の多い街樹を植ゑる。東西の幹線を *Rajapatha* 即ち王道と稱し、南北の短い方の幹線を *Mahakala* 即ち廣路或は *Vamana* 即ち南路と稱す。

村の周圍には疊壁があるわけである。その内側に *Mangala-Vithi* 即ち幸運の路と稱される村人等の祈念用の巡回道路がめぐらされる。

村と中心の幹道の交叉點は長老會議の集り場になつて、ここで彼等は地方的な問題を討議し處理する。小さな村ならそこを小高くして、菩提樹を植ゑ、大きな村ならば、木造、煉瓦造乃至石造の亭を設ける。この菩提樹を使用するには古い淵源があり、この國の古き聖者が無上正覺を得た歴史にあやからんとするのである。又この樹自體にも宇宙に通ずる靈能があるとされ、日月星を産み、空の圓天井もこれの蓋であるとされてゐる。

小さな村ならこの樹蔭で十分に村議を練るに足りる。村人等はそこで村政の五重役を推擧したりすることが出来る。尤もその場合、村長は世襲だから何か餘程法にそむく様なことをして部族長から免せられるのでない限り變ることはない。

大きな村や、都市等では、この推擧の集りを公園だとか門の所に菩提樹のある神聖な墓地内等でやる。

村の幹道の幅は、一番太いのが五 *danda*、他の幹道は一―五 *danda*。

小住宅は二四尺×一六尺乃至四〇尺×三二尺を一般とする。これを四つづつ組み合はせれば、その中央に四角乃至矩形の空地が出来る。これも亦魔法の廣場で、かうやつて置くと、毎夜放牧から追ひかへされた家畜をこの中に入れて置けば逃げもせず變はれもしないことになる。

この四つの家を一家族が有つことになると、中の庭はそつくり一軒のものとなる。

これは結局に於て印度の家の形式であつて、部族乃至村の酋長等の世襲家族の屋敷の形式である。そ

して、これがこの地方の氣候に最も適した形式として印度一般に踏襲されてゐる。尤も何でも歐羅巴が好いと考へてゐる連中は、勿論歐羅巴の風土社會にしか適しない、暑くて不衛生な西洋建築に住んでゐる。村の小住宅が結局大住宅の計畫の單位を成したやうに、村の計畫が亦、都市の計畫即ち mahalla の單位となる。

次に Manāsāra は四〇〇の村や都市の形式を擧げてゐる。

その中には、五〇〇 danda 即ち四〇〇〇〇平方のから二〇、〇〇 danda 即ち三〇哩平方のまである。この面積の大半は建築面積だが、あとは農地になる。又、村や町の形は決して四角でなく矩形になつてゐる。その長邊が東西になつても居り、いかに大きな都市でも換氣が出来るやうにしてある。或記述によれば、この矩形の比率は一對四と云ふことになつてゐる。

Pataliputra は九哩の長さに對し巾は一・五哩である。Hindu Gaur も長い矩形である。

矩型の長邊は概ね湖乃至油川に面して向けられる。これは市民の水浴の便及び壘壁の儉約にもなるのである。

これ等について Manāsāra は四つの例を示してゐる。

最も簡單なのは Dandaka 型と稱するもので、これは隱遁的な居住乃至宗教團體等の居住の一形式である。

これは五本の東西線（中一本は幹線）及び三本の短い南北線で出来てをり、後者は前者を中央及び兩端近くで切ることになる。村の北東及び南西部には、沐浴用のタンクが設けてあり、多くの佛閣はそれぞれ信徒の中心に配せられてゐる。その中最大の寺は王路の兩端に設置され旭日を仰ぐ様になつてゐる。小さいのは郊外や壘壁の内外に分布してゐる。

この壘壁には四つの大門があり、それはそれぞれ幹線の末端をうける。

又小さい門は村の對角線の角々にある。この中に十二家族から三百家族まで入る。

Nandyavarta 型と稱するものは――

都市内部のそれぞれのブロックは皆家屋が二列であるが、一番外側の狭いブロックだけは家が一列になつてゐる。これ等は總て階級的であり、ブロック毎に種別されてゐる如くである。最高のもものは中心部に居住し下る程度に出る。最前側のブロックは悉くバザアの爲のものであらう。門に近いから市場税などを取るのに都合がいい。

Umaga Jutaka では明かに東西南北にバザアがありこの王都に於ける縁邊の需要を充してゐる。

そして二つの幹線は定石通り中央廣場で交叉してゐる。その中央には集會堂乃至佛閣がある。佛閣は四方に門がある。

Padmaka と稱する型は蓮の葉に似せてある。

この案によりいかに彼等が幹線を東西南北の中間（即ち東南―西北と云ふ様な）に配する事をさせてゐるかが解る。それは決して感傷からではなく、實際上の利便の根據からなのである。

村の中心から蜘蛛巣の様に中心から放射線を出すことは印度の計畫家達にとつては明らかに表象的で

あり、誘惑的である。然しそれを頗る實用的な理由でさけてゐる。

即ち、第一の理由は、この形はもし敵が侵入しこの中心部を押へた場合は手も足も出なくなる、第二は交通混雑の問題乃至村の中心の建築敷地の問題、第三には道路の陽ざしが皆悪くなることである。他の最も興味ある例は Manasara 即ち正型のものである。この正と云ふのは神祕の十字で宇宙の四方をかたどつてゐる。尤もこの道路配置上の實用價值は、四つの門の防護し易さにある。又これは印度アリアンの宗教上の羅針盤にもなつてゐる。即ちこの形が太陽の虚空上の通路を示す所から、ヒンツウの宗教上の動作——例へば社寺の巡詣の巡路等は總て中心を右にとつてこの順でまはることになる。哲學的にはヒンツウの或宗派ではこのしるしを開展を意味するものに用ひ、又これと逆な方向のものを退行的な表示に用ひてゐる。

この計畫では各部分の家のブロックは正の左から右へまはる動きを示すことになる。

これ等は然し實は夢であつて、實際となると事情は變つて来る。それについて Venkatarama Ayyer は次の様にのべてゐる。

これ等の型は、尤も古代都市の壘壁決定の際數學的正確さで守られたとは云へない。壘壁がきまればつづいて一定面積上に、階級別になつてゐる人々を階級別に居住させなければならぬ。それから空地、公共浴場、公館、學校、市場、體育場、公共競技場等々の都市施設が配置される。宮殿の面積は十分にとられなければならない。その残餘が學校や道路や住宅になる。

これ等が濟むと新都市計畫のそれぞれの施設に附帶して木立や公園が配されることになる。

寺はかくして都市の中心に置かれ、その周圍には森嚴なる光背として樹木が配される。

然しその樹は別段數學的な正確さで形を與へられてゐるわけでもない。

計畫道路の中には廣いものもあるが、曲りくねつた道路もあり、迷路もある。廣い道路は河の様に廣く兩側の家はまるで沿岸の喬木の様である。このひとつは誠に妥當で、廣い道路は丁度好い自然配置なので、雨や洪水は工合よく流されることになつてゐる。

市場は二つあり、一つは晝開き、一つは徹夜開かれる。

この二つの市場は近接してゐるが、然し太い道かなんかで必ず隔てられてゐる。

小あきなひの商人や織布業者は、王宮のまはりにも品物をひろげる。

王宮のまはりは大官や顧問や、その從屬者達が住人である。その道路の廣さに沿つて特に廣い所では織布業者達が品物を廣げるのに少しも心配ないやうになつてをり、小商人も種々な布地をそこへならべていいことになつてゐる云々。

x

印度都市概表

アグラ 人口一八・五萬 ムガル帝國來の舊都、堡壘もムガル系。道路は迷路
德里 ムーガル以來の舊都、堡壘及び園廊あり、迷路
ラホール 故都、堡壘及び園廊あり、迷路

ベナレス 聖地。保衛軍共になし、迷路

ハイデルバッド 一五八九年立都、人口五〇萬、第四部、圍廓あり堡壘なし、迷路

アーメダバッド 一四二一年頃立都、モゴールの都、圍廓あり、堡壘なし、宮殿あり、迷路、人口

二一・六萬

アジマール 十一世紀末立都、人口八・六萬、セゴールの都、圍廓あり、宮殿あり、迷路

グワリオール 一三九八年末の都市、人口四七萬、圍廓なし、山上に堡壘あり、迷路

ルツクノー 人口二五・九萬、圍廓なく、堡壘あり、迷路

チャイプール 一六九九年頃立都、人口一三・七萬、圍廓あり、堡壘あり、完全なる縦横型、宮殿あり、廣場あり、極めて近代的

ビジプール 一四八九年頃立都、人口二・四萬、圍廓あり、中央に寺院あり、廢都

ラスプールシクリ 一五六九年代立都、アリバルの廢都、圍廓あり

カルカッタ マドラスより新しい。(一六九〇)、東印度會社の所在、堡壘あり

ボムベイ 一六七二年の都市、人口、九七・九萬、古ボムベイとは別。バスコダガヤと縁故あり

市街は歐人建設。堡壘あり

マドラス 十七世紀以後、英人の建設、堡壘も英人による、圍廓なし、縦横型

ミソレー 人口七・一萬、一八〇〇年來の都。路系やや整ふ。湖畔に堡壘あり。壘中に市街あり

パンガロール 人口一九萬、夏期都市、路系整ふ散在

この印度の都市計畫の現實と理想の中に、何物かがないであらうか。

これ等の夢を有ちつつ（或は村落や小都市としては實現したかも知れない）

尙現實に於て迷路の大都市を造る（それは回教國の隅々に行き渡つてゐる所の）、その現實も亦何かを語つてゐないか。單純なる「技術家のあたま」では受容し切れない何物かがそこにあるやうな氣がする。

そして結局ゆるかせに爲し難き、又最も香り高き仕事が都市計畫技術者に課せられてゐることを「印度の都市」は教へようとするのではあるまいか。

勿論南方は必ずしも印度ではないであらう。南方に於ては自由に放たれる我は、我々らしく強き創意によつて爲せばいい。然しそれにしても、それはゆめ「安易」ではあり得ないことだけは確認してかかる必要があるのである。

大東京の構想

一 日本全土の構造を都市の角度から観る

(一) 都 力 線

今、私が「日本全土の構造——これを都市の角度から観ると、自らそこに都力線と云つたものを感じる。」などと云ふ様なことを申すと、皆様の中には「都力と云ふのは何だらう？」と云ふ顔が直ちに見える。御尤である。これは私が勝手に振りまはしてゐる新語で、いはば法幣の様な地方政權濫造紙幣の一つであるが、但しこの法幣も私だけには意見がある。私は都市計畫を長くやつてゐて、都市の中に力のある都市と力のない都市とがある様な氣がして來た。一方

道路だけを計畫して、一向それを實現しない都市があるかと思へば、道路が計畫されるや否や、市の財政でやつて貰ふのはまだるこいとばかり、どしどし地主がやつてしまふ都市もある。千葉縣の銚子市は人口こそ六萬しかないが中學を縣が建ててくれなければ自分で市立のを建てる、水が足りなければ水道を敷設しようと云つた風に積極的である。どこの市もそんな風だとは考へられない。明らかに都市に力の差がある。そしてこれは明らかに、その都市の後背地方の富度の總力である。その地方の農村漁村が潤つてゐれば、その盟主としての都市が力を出す。農村漁村が貧しければ都市も貧しい。嘗て愛知縣の一宮市は全國の市が赤字の時にたつた一つ黒字だつた市であるが、この町の繁榮は尾北一帯の工業村落の結論である。

勿論、その都市の君臨してゐる地方の繁榮とその都市の繁榮とが常に等しいと云ふ譯には參らぬ。都市は元來商業を以て本質とするが、近世紀から御承知の様に工業と云ふ副業を始め、これが都市にとんでもない活況を呈させること

になつたのであるが、これは都市にのみ起り易いものである關係上、附近の農村は疲弊してゐても、その中心たる都市のみ繁榮力があると云ふこともできる。山口縣の宇部、宮崎縣の延岡の如き、その發展の旺盛さは決して附近の農村の農業力や漁業力の反映ではないが、大體に於て、都市の力はその地方の力だと云ふことは特殊の例を除いて云へる様な氣がする。

何故かう諄くこのところを念を押すかと申すと、私は先程全日本の構造を都市を通して観たいと申上げた。全日本の構造とある以上、これはどうしても地方の積み上げたものでなければならぬ。都市がもし地方と關係ないものならこれをいくら論じた所で全日本は出て來ない。そこで、この柿と蒂とをしつかり結びつけておかないと、折角腕いで來た枝が蒂ばかりだつたと云ふ笑ひ話になるといけないからである。

然らば都力とは何であるか、どうやつてこれを測定するか。恐らくこれは學問的に厄介な問題であらう。然し私達實際家にとつては、たとへそれが學問的

に正確なものであらうとも、それが容易に手に入らない様な資料であつたり、複雑多岐なものであつては拜領出來ない。簡單に手に入る資料で常識の域を出ない判断で間に合ふものでなければ困る。そこで私は初めこれは稅務署の諸資料でやらうかと思つたが、この細かいものが中々手に入らないのみならず、その資料は稅を取るために作られたのであつて、國力都力を見る爲にやつてゐるやうに暢氣には出來てゐない。従つて、これは御免蒙らざるを得ない。私は市政調査會で出してゐる日本都市年鑑と云ふ本を何よりも愛讀してゐるが、これなら誰の手へでも容易に入る。そして實によい統計がぎつしりつまつてゐる。そこで、出來るだけのことをこれでやつて見ると云ふ方法を考へつゝいた。

そこでまづこの中から、都市の生産力を表すものと消費力を表すものとを拾ふ。生産力、消費力を表したものが都力だと云ふ考へ方からである。尤も都力の本質から云へば、消費力の方が重要であるが、如何せん今日の都市は、生産力をもつて評價されなければならない情勢にある。よつてその一般情勢に倣つ

て、この二つの力、特に不本意ながら生産力を主に観なければならぬ。

生産力を見る指數、それを生産係數とすれば、これに相當する數字は何であるか。云ふまでもなく第一が人口増加率、續いて生産率自體である。人口増加率と云ふものは勿論、その都市が生産に優れてゐるのみならず、その他の機能が強くても増し得るものであるが、それは實は大したものではなく、事實上は生産以外にこれを強く刺戟するものはない。よい例が、この人口増加率と生産率はかなりよい形で比例してゆく。そんなら片方だけ使へばよさうなものの、やはり統計と云ふものは融通のきかないところがあつて、一つだけでは危険だから、私は必ず併せて使ふことにしてゐる。

さて人口増加率の標準は、國勢調査に於て、即ち五年間で一五%を標準とする。日本の自然増加は大體五年間に五乃至六%だから一〇%でも標準としていいが、種々の都市を見ると一五%位から俄然眼に見えて活氣を呈してゐる。それから生産率であるが、これはその町の總生産額を人口で除したもので、

この標準が三〇〇圓、長野八五・盛岡八二・別府六二等の如く百圓を切つてゐるのがあるかと思へば、川崎一、九八七・八幡一、三七〇・尼崎一、五五七と云ふ様な千圓を超えてゐるものもあつて、一流の落ちついた都市は三〇〇圓内外である。

消費係數は又實に捉所がないが、私は電燈の一戸當り、藝妓、娼妓、女給等の花柳婦人の比率、最高地價の人口一人當り等で計る。花柳婦人の率を用ひるとどうも不眞面目におとりになる方が多いが、私はこの花柳婦人の數位世の中の景氣に比例するものはないと思ふ。不景氣になつたから自暴酒を飲み出すことがはやり出したなどと云ふことは聞いたことがない。これは何と云つても最も敏感な景氣指數でなければならぬ。それから消費機關の使用はたとへそれが何であらうと夜間が多い。従つて消費が盛になれば當然燈の需要が増して來なければならぬ。これが燈率である。

又、その町の小賣商業が榮えれば當然地價に響く。この三つの指數はかなり

よい所を表はすと思ふが、ただ地價だけは都市年鑑にない。従つてこれを用ひることは私の趣旨と反するが、只これはその土地にさへ行けば誰にでも聽けるものであるので、特例として用ひさせて貰ふ。又、この地價と云ふものはどうも正確なものが解らない様な氣がし易いが、實は私の永い經驗によれば、やはりこれも二割と差のない報告が入る。

さて、これ等の標準數字であるが、花柳婦人（妓率）は人口千人當五人、燈率は一戸當り五燈、地價は人口一人當五厘、大體これらを標準にすると、都市のその方面の力が浮き出て來るやうである。

さてかうやつていろいろな統計を造りあげ、これを比較研究すると、結局都市には都力的に申して次の型がある事が解る。即ち

- 生産型 生産係數優位、消費係數劣位
- 消費型 生産係數劣位、消費係數優位
- 充實型 兩者優位

消耗型 兩者劣位

これ等の型のそれぞれを代表者を引例して話を具體的にしよう。

生産係數優位都市

消費係數劣位都市——吳、八幡、三崎、尼崎、延岡、宇部、戸畑、清水、足利

消費係數優位都市——福岡、岡山、濱松、小倉、岐阜、福井、久留米、岡

崎、若松（福岡）、二宮、大垣、今治、沼津、倉敷

生産係數劣位都市

消費係數劣位——長崎、函館、鹿児島、高知、千葉、前橋、松本、山形、秋田、都城、宇和島、鶴岡、上田

消費係數優位——下關、旭川、高松、宇都宮、別府、大分、奈良、松江、

宇治山田、佐賀、鳥取、福島、山口、川越

つづいて、この分布による日本の構造となるのだが、ここで地價の話が出た

から、一言私の「地價考」を申上げ、御批判を得たい。

地價については私は古い歴史をもつてゐる。私が名古屋で土地區劃整理をやつてゐた大正十一年頃からずつと研究してゐたが、區劃整理をやると地價が上がる。それで何となく私が地價を煽つてゐると云ふ噂になつてしまつて、評判がよくない。そこでこの機會に一つ地價の科學性を觀察したいものだと思つて、全國の同僚の所へお願ひして地價の資料を送つて貰ひそれを眺めてゐる中に、どうも人口と何か關係がある様だと氣がついた。そこで後から後からと届く資料を人口で割ると、何と皆人口一人當一錢と出る。これは面白いと云ふ譯で、それから時々統計的に研究して參つた。そして結局、地價と云ふものは個人が煽つてどうなるものではない。これは都市の力が決定するものだと言ふことが解つて來た。爾來何と云はれようとこれを示して擊退することにしてゐる。それはさておき、このやうな因縁で私と地價の關係は古い。そして最近到達した結論は、地價は少くも日本に於ては次の如くである。即ち

$$L = K \sqrt{P}$$

P はその都市の人口、 L は最高地價坪當り圓である。 K はその都市の質に應ずる係數で、その町が商業都市なら、五十萬以上の大都市乃至工業型の都市なら、 L と云ふことになる。よつて人口四萬の商業都市は

$$L = 2 \sqrt{40,000} = 400$$

となり、六百萬の大東京は

$$L = 1 \sqrt{6,000,000} = 2,500 \text{ 圓}$$

と云つた様になる。

尤もこれだけでは研究が面白いところに達してゐない。何故かう云ふ形になるかと突込んだら本當に面白からうと思ふが、時間がないので果し得ない。

因にこれを外國都市の地價（上海にて得たる資料）に當てて見ると、どうも大變違ふ。違ひすぎる程であるが、それを東洋都市に當てると、今度はぐつと近くなる。或はこれは東洋公式とでも云ふべきものかも知れない。

(二) 都力線の分布

さて以上大體都力の觀念及びそれによる都市の型について申上げた。今度はこれが日本に於て如何に分布してゐるかを調べてみよう。

これは圖面を作つてみるのが最もよい。そこでかくの如きものを拵へて見る。

(圖面略)これを靜かに觀察してみるならば、次の様な結果が出てくる。

消費係數多き都市の分布

妓 率 ○北緯三十五度を中心とせる地帯に多し

地 價 率 ○北緯三十五度帯にあり

○中部日本及び東北地方への擴がりあり

○大阪廣島間に高峯あり

燈 率 ○明快ならざるも大體前二率に従ふらしい(北海道に

は不思議に他の率と別な地帯を採る)

生産係數多き都市の分布

生 産 率 ○北緯三十五度帯を爲し特に名古屋及北九州間に明快

○中部日本一帯

人 口 増 加 率 ○北緯三十五度帯に多い。特に東京、名古屋、大阪、

北九州の四點に集中してゐる

この外に折角統計があるので、序に以上の二係數の外に、以上の結果富の蓄積が起る、それを直接國稅一人當乃至郵便貯金の一人當により圖面にあらはして見ると、明瞭に北緯三十五度地帯が浮き上つて来る。

(三) 結 論

かうして日本の繁榮を都市の力を指標としてさぐつて見ると、次のやうな結果を得る。尤もこれは平凡極まるもので讀者の知悉してゐることを更に繰り返すだけであるかもしれぬが、それでも食事は食事時にした方がよいと云ふ事を明らかにして、その結果として重要なのは次の如くである。

○生産率は完全に北緯三十五度地帯を成立せしめてゐる

○消費も大體さうらしいが、然しこれは生産ほど明快ではない

○兩係數とも北九州、大阪、名古屋、東京の四大地方に於て特に強く集中を示してゐる

○中部日本へ都力線が上り始めてゐる

この調査の副産物として、どうも生産型、消費型の都市で、時間距離三十分乃至一時間位の所で一對になつて存在してゐるのが方々にあるらしいと云ふ事を發見した。私の知つてゐる限りでも、北九州諸都市と福岡、山口市と宇部市、宮崎と延岡(これは餘り適確な例ではないかも知れない)、桐生、足利と宇都宮、前橋、川崎と横濱等の如く一方は純粹の生産型、一方は純粹の消費型で互に分化する、しかも連結して一帯となつてゐる。かう云ふ都市が特にこの日本の繁榮地帯北緯三十五度線——これを私は日本の銀座線と名付けてゐるが、この銀座線の中にあるのではないかと思つた。これも一つの結論と云はば云へよう。

この結論と關係はないが、人口關係の基礎調査として死亡率と出生率とを調

べて見た。所が、この二つが飛んでもない曲者で、例へば

死亡 率 銀座線を除く地帯に多し

出生 率 名古屋を界として、東に積極的に多く、西は積極的に

少し

これを何と説明すべきか。興味津々たりと云ふに止めなければならぬのは甚だ遺憾である。

以上で第一部を終ると云ふ呆氣ない次第になつたわけであるが、このやうに甚だしまりのないもので、細引で鯨をしぼる様な心許ない結果である。私はこれ等はまた、一般には氣候の關係、過去の發達を見る爲には米の集散關係、又現在の問題としては興亞政策の諸關係、或は動力の分布、勞働力の分布乃至交通機關の密度と云つた様な、あらゆる角度から、検討さるべきものだと思つてゐる。

二 關東平野の構造

以上述べた所で、大體日本の構造の一つの面が幾分出たとして、大東京へその結論を導いて來る爲に、富の四大集中點としての關東平野について少々申上げよう。

尤もこれも私の前任地の濃尾平野と比較した方が話が立體化するから、知れる知識の範圍内で併せて申上げる。又、都市の分布ならば攝津平野も解つてゐるから、そんな所も引例しつつ述べてみよう。

60

(一) 平野に於ける都市發生の個所

これは關東平野及び濃尾平野について觀ると、面白い結果が出る。即ち兩平野とも

山麓線

輕工業都市

沿海線

重工業都市及び首都

交通線(平野内の) 商工都市

山麓線には關東平野では、桐生、足利、前橋と云つた様な輕工業都市、濃尾平野でも岐阜、大垣と云つた様なものが出てゐる。尤もこの形の判然としてゐるのは關東であつて、濃尾ではそれから一宮、名古屋とずつと一般的に擴がつてはゐる。それから沿海線に重工業が出來てゐることは各平野共通で、これは例證するまでもない。面白いのはこの商工都市の發生で、これは學者の間の興味ある問題になつてゐる。それは濃尾平野の構造の研究から始つたのであるが、嘗て尾原と云ふ人が農村工業地理と云ふ本を書き、濃尾平野の構造の研究を發表した。それによると、濃尾平野の工業は、平野の内、農村的に優れてゐない河の亂流區域でそして交通の幹線の通つてゐる名古屋、一宮、岐阜、大垣の線に顯はれた。それはその部分の聚落が已むなく貧乏をする。然るに周圍は肥えた農村である。ましてや自分は交通の要路にあると云ふ譯で、逸早く手工業時代に入つた。それが資本集中に役立つて、今日の商工都市地帯を造つたのだと

61

説明してゐる。

然るに一方關東平野については、をかしいことには、ここでも丁度濃尾平野と同じに、東京を中心に西北に向つて斜に聚落密度が多い。これについて別の學者はかう説明してゐる。即ちこの地帯は農業的に非常に優れてゐる。従つてその中を通る交通幹線を中心として、その米が集散された、そこに商業都市が出来、その商業資本に依存して工業が起されたと云ふのである。

これでは丁度説明が逆である。そこで私は事のついでに關東平野全體の産業地圖を調べて見た。これで驚いたのは又しても現實なるものの不可思議である。

まづ地圖を御覽になればお解りになるやうに、東京を中心に南北軸を通し關東平野を二分すると、判然と東半部は農業に於て著しく強大であり、西半部は又輕工業に於て壓倒的である。これで見るとやはり結局、濃尾平野の如く、農業的に肥えた所は工業化しにくいと云ふことになる。結局これはその學者が、東京、熊谷、高崎の線を農業的に肥えたりと申したのは、その部分として肥え

てゐると云ふので、「關東平野としては——」の比較論を失してゐたのであるかも知れない。何となればこの農業第二次區域工業發生論には、それかと思はせる根據がある。即ち、理研の大河内さん等は、工業立地論に於て、農村に於ける餘剩勞力のある所、低賃銀の所に工業が起り易い様に云つてをられる。そして新潟等の雪國で農村工業に成功してをられるが、農業的に勞收の多い所の工業化の至難なことは、想像出来さうに思へる。

又、考へて見れば、關東平野の内最も輕工業の濃度高い群馬一帯は濃尾同様利根の亂流區域に當つてゐる。どうもこの産業地圖に照らし、濃尾平野で得られた尾原氏の結論に軍配が上りさうである。

現在私達の都市計畫も、段々地方計畫と云ふ風に看板の塗りかへが云々されてゐるが、それにしてもさうなればなる程基礎學としてこの方面の研究が重要になる。ドイツのナチスの地方計畫等は、學者によつて立地突撃隊と云ふのが造られ、この突撃隊の十二分の研究を俟つて初めて計畫されるときいてゐる。

の再組成といふ。銀座線までは明らかに一地方の力が決定する。然し平野の中では、今度は中心たる都市が周囲の中小都市の發育を支配する。「さう云ふことになつてゐる様である。

(三) 中心都市の暈

今度はその中心都市が周囲の都市を支配する仕方を吟味し、それを中心都市の發展形成から逆に覗いて見よう。

まづ中心都市の延びる形だが、これについては、私が愛知縣の二、三の都市について調べたものが「都市動態の研究」と云ふ至つて小さな本になつてましまつてゐる。恐らく本屋（刀江書院）は絶版にしてゐるようだが、何かの折に入手出来たら御一讀願ひたい。その研究の結果、都市は三つの形でのびてゐることが解つた。

都心集中型

人口三萬内外

郊外溢出型

人口一〇萬以上

衛星都市幅射型

人口五〇萬以上

細かい説明は繁雜になるから略して、東京、名古屋が今の所幅射型に入つてゐると云ふこと、即ち自分の周圍にある中小都市に人口を返す形をとつてゐると云ふことを申上げるに止める。

それから郊外溢出に屬するにしては頗る妙な現象が、東京、大阪に限つて起つてゐる。それは直ぐこれ等の都市に接して工業力旺盛な都市が育つてゐること、例へば東京では川口、市川、川崎、更に立川と云つた川づくしの都市、大阪では尼崎、堺等である。この研究はする必要もあり、するまでのこともない様であるが、都市計畫には重大問題で、殊に東京に對する川崎、川口、市川、大阪に對する尼崎の如き、行政區域を異にするかうした都市の強勢は、大都市分散と云ふ都市計畫の近代理想から云つて、弱いものに屬する。これ等についてはいづれこの最後に都市計畫の事を一寸申上げるが、その時も少しお話出来ることと思ふ。

以上は人口の飛び出し方であるが、中心都市は人口の輻射に於て、附近都市に影響を與へることは勿論ながら、それ以外に機能としても影響を與へる。例へば

商業上の對應

工業上の對應

居住上の對應

慰樂上の對應

・その他の對應

と云つた様な對應を自分の影響範圍に強ひる。大體關東平野では東京を中心として一五キロまでの都市には、商店街は市場的な商店街たることしか許さない。又三〇キロになると、どうやら散歩しても少しは面白いかと思はせる様な、ネオンや街路照明の美しい町を造ることを許す。そして一〇〇軒になると、宇都

宮の馬場、甲府の甲府銀座と云つた様な慰樂性の濃い盛り場の育つことを如何ともしがたいと云つた様な、支配の仕方をする。

工業についてはまだ何も申上げる結果をもつてゐない。

居住と云ふのは先程申上げた人口の衛星都市への輻射であつて、鎌倉、逗子、浦和、船橋等と云ふ居住適地にどしどし人口が出てゐる。従つてさう云ふ都市は居住と云ふ形で變容してくる。又慰樂では綠地關係であるが週末ハイキングの群の行く半徑は年々歳々延びてゆく。これがそれぞれの地方に對應を強ひるのである。

その他中心都市の國防の立場から、或は中心都市の直接の御用の爲に、周圍の都市が動員され對應してゆく。かうした對應の集積が平野都市の本質となつて、そこにある各都市の不思議な獨立性のない盛衰をきめてゆくのである。そして又逆に中心都市はさうした都市をひき従へて、全平野を領して行く。これが關東平野と大東京の關係、そして又大東京自體の立體的な形なのである。

三 大東京の構造

(一) 大都市郊外の延び方

ここでお話をぐつとかへて、都相と云ふことを紹介しよう。都市に都相があり、人間に人相がある。——と申したら、人間の相は解つたが、都市の都相は例によつて大袈裟な云ひ方だらうと仰言る方がありさうである。ところがこれははるか海のかなたなる支那の、しかも故人の發明にかかはるものである。彼等はいふ、都市は次の様な相をもつた時最も股脈を約束される。即ち「北に山あり西に丘、東に河あり南に平野廣き場合」都市は發展する。この北に山あるを白虎、西に丘あるを玄武、東に河あるを青龍、南に平野廣がるを朱雀の相といふ。成程それで京都の計畫に南面して朱雀門のあつたことがうなづかれる。この相は特に吉林から發祥し、奉天で南下朝鮮に入つてをり、これが滿洲に起つた代々の民族の興亡の流れを示してゐるのださうであるが、それはさて置き、

どうもこれはやはり北半球の都市としては理想の型に近いのではないかとも思へる。と云ふのは、どうも大略に於て都市はこの形を意識しないで追つてゐるらしいと思はれる節がないでもない。尤も大阪の如きはまるで北西に河が廻つてしまつたのがあつたり、名古屋の様に自分で丘の上に昇つてしまひ、しかも河をもたないと云ふ様な變り種もあるが、東京は北の條件が缺けてゐるのと南が狭い差はあるが、北に丘、東に河をもつてゐる。京都は云ふまでもなく都相そのままであり、その他日本は別としても各國の大都市とも何となく、——何となくの程度であるが、似た様な形を示してゐる。

尤もさればとて、今私はこれをこじつけて各國の各都市をこの相にはめて玩具にしようと云ふのではない。私はただこれで各都市のスラムが東にあるらしいといふ俗説の解説をして見たいと思ふ。

都市は大體支那人の云つた様な都相、少くも東に川、西に丘をもつ型を喜ぶ。とすると明らかに東にスラムが來ることになる。と云ふのは云ふまでもなく都

市の發展はまづ工業的に來る。これが十分に騏足を伸ばすのは低段地、殊に河港の航行關係に根をおろす。そこで十二分に煙突を亂立させ、都市景觀をスポイルする。

これは労働者は必ず工場の徒歩距離圏（半哩）内に定住すると云ふ原理と相俟ち、都市美的にスポイルされた土地は彼等労働者群により占據される。これはいくら賑かであつても神經過敏な所謂青白きインテリの趣味に向かない。益益純化される。さうしていつの間にか交通労働者の下まはり及び都市の紙屑整理者たるルムペンプロレタリアートの居住適地ともなつてスラムが出来上る。もしこの都市が都相に従ひ東に河川を有てば、ここでお約束通り「東にスラム」となるわけである。すこし落話みたいであるが、幾分の眞はあらうかと思はれる。又、東にこれを限る第二の原因として、都市がかく工業的に充實すると自然商業中心が發達を示しインテリ層が殖えて來る。これ等の連中は交通機關の發達を俟つて郊外に出て、當然東と對蹠的な山の手、もしこれが都相に合つて

ある都市なら西部の丘陵にかけ上る。これは東部工業地域への延び方の倍の速度で延びる。（名古屋での實測）これはこの方面の地價を高揚させ、この地價がこの方面の性質を動かぬものにする。これ即ち大都市の延び方の定型であり、又何故にスラムが東にあるかと云ふ話のサゲである。サゲはともかくとして面白いのはかうして出来るスラムは都市には必ずと云つてよい附物であり、その距離が決して郊外はるかに延びないものだと云ふことである。例へば名古屋では都心を中央に一・五哩の直徑で場末帯の内圓が描ける。それから又一・五哩の厚味で場末帯が擴がり、その中にスラムが散在してゐる。勿論大名古屋は、その外にはるかに美しく延びてゐての話である。それから横濱での調査では、横濱のスラム十二の中七つは都心から一哩の所にある。これはいづれも彼等が都市の必需品であり、しかも彼等は徒歩距離を生活の根據としてゐるからであらう。東京についても調べたら恐らく同様な結果が出ることと信じる。

さて今度は頗る變つたものを捉へて、大東京の構造を示さう。尤もこの際もあくまで東京だけの話でなく、大都市一般の構造論として申上げ、東京の例で肉付けすると云ふ技巧を採用する。

私は十餘年前役所から歐米出張を命ぜられ、約一年の間歐米の都市を一つ一つ見て歩きながら、非常に不思議なものを感じた。それは彼等の都市は一つのみとまつた家族的な構造をもつてゐると云ふことである。例へば町の中心には廣場がある。そこには市役所や教會が堂々と面してゐる。道路と云ふ道路はそこへ放射形に集つてゐる。都市の外周には城壁がある。明らかにこれは一軒の家が垣根を持ち、家の中に茶の間をもつてゐるのと同じである。市民はその廣場に集つて、日曜の午後、平日は夕食の後と云つた様な時間を、お互に歡談しながら楽しんでゐる。こんなのは日本の都市にない。これは實に大きな質的な差であると考へた。特に歐羅巴の都市はギリシヤ、ローマの昔からこの形を取つてゐる。どうも彼等にとつては公式らしい。羨しいことだと思つた。

尤も彼等のこの團欒主義の都市と雖も、その完全の團欒を味はつたのは十六世紀位までで、十八世紀になつて交通機關と云ふ剽輕者が發明されてからは、この共有の茶の間である道路や廣場はまたたく間にこの横暴者に取りあげられ、市民諸君はやつとこせと歩道の上で昔を偲んでゐるに過ぎない。然し私はその殘飯生活さへ羨しいと思つた。昔の市民生活はどんなであつたらうかと思ふ。

都市とは何であるか。いろいろの説明もあらうが、これはかう云ふ形式で人間同志が暖く共同の一家を爲す大家族が即ち都市であると私は考へる。田圃の中や山の陰でたつた一人で一生を終ることはどんなに孤獨な味氣ないことであらう。明るく賑かに好い心の人達だけが集つて暮す、これが人間の楽しい生き方、生れてよかつたと云ふ生き方でなくて何であらうか。彼等の都市はさう出来てゐる。日本の都市はさう出来てゐない所か、横暴者の車を通ずることを人一倍自慢でいらつしやる。これでは長野縣の山の中に住むことと、大東京の中心に住むことと、いづれが幸福かと云ひたくなる。彼等の都市が羨しくてなら

ない。況や、今日「我等が日本人と云ふ一つの意識に束ねられる」事が重要中の重要なことになつてゐる時特に然りと思ふ。

然しこれは今の東京人の様に隣の人は何をしてる人だか、市長の顔も市役所の建物も見たことのないんでんばらばらの隣人意識の零な連中が冷たい表情で集つてゐるだけで出来ることであらうか。どうも出来さうもないと云ふ方が本當の返事の様に見える。兄弟喧嘩ばかりしてゐる家庭では、「親父は外へ出つ放し、お袋は學校の先生」と云ふ家庭が家庭になり切れないのと同じである。これはどうしてもまづ何等かの方法で隣人をあたたかくつなぎ合はせ、そしてそのつなぎ合つたあたたかい第一次の市民群を更に大きく集め、更に集めると云つた風にして隣人意識をつむいで大日本にするのでなくはいけないと思ふ。まあそんな様な譯で、日本の都市には構造上遺憾なところがある。外國から歸つて來てから折にふれ何とかならぬものかと考へてゐたが、ある時夜の町を歩いて見てそこに、商店街と云ふ盛り場が一定の距離で燦然と明るく輝いてゐる

事に氣がついた。計算して見ると、その分布は丁度一哩毎になつてゐる。これを半哩半徑として人口を計算して見ると、丁度十萬位這入る。何とこれはブラトンの云ふ理想都市の人口十萬にして、徒歩にてまとまる大きさと云ふのに、そつくりではないか。そして市民はお誂へ向にその盛り場に集つて、何と云ふ特別の目的もなく交歓してゐる。これは好い。こんな氣のきいたことをやつてゐたのだ。これなら廣場がなくとも一應許せる。

誰やらが空を仰いで星辰の整然たる運行に涙を流して感心したと云ふが、それは少し大袈裟だと思つてゐる。まさか泪は流さないが、人類は一寸見は出鱈目であつても、決して眞底から出鱈目ではない。必ずや、何等かの方法で理想と思はれる形式は踏んでゐると云ふことが解つて嬉しく感じた。

かくして私は更に第二の結論にも達した。それは即ち大東京は決して一つのものでない。少くもこれは生産東京の上に居住東京が重なつてゐる。そして居住東京は各盛り場を中心として銀座市、新宿市、阿佐ヶ谷市と云ふ都市に分か

れてゐる。即ち大東京は都市の聯邦であると云ふことである。

これを内容によつて分けると、総合盛り場、歓興盛り場、商店街盛り場、都市美商店街、市場商店街となる。

総合盛り場と云ふのは、銀座の様に一方に有樂街や、木挽町、數寄屋橋と云つた様な見世物街、或は西銀座の様な飲食街と銀座通の高級商店街とを組み合わせたもので、新京極、四條、心齋橋、道頓堀いづれも同じ範疇に屬する。東京では銀座、新宿と云つた所であらう。

歓興盛り場と云ふのは、淺草の様な見世物食ひ物の盛り場で、支那滿洲の盛り場、まかり間違ふとヨーロッパあたりの盛り場もそれである。東京では淺草と云ふことになつてゐるが、嚴密に云つたら今の淺草はどうも綜合くさい。

商店街盛り場と云ふのは、人口二三十萬位な都市の中心にあるもので、商店街の一部が一寸映畫館やカフェーの集團で景氣がつけられてゐる奴である。關東地方では宇都宮の馬場、長野では松本の繩手、千葉で銚子の觀音を中心とし

ての商店街等、大なり小なりこの好い例であらう。東京では池袋、上野、澁谷等と云ふのがこれに入る。都市美商店街と云ふのは、さう云つた娛樂施設が中心を爲してをらず、ただ街路照明や、ネオンで町がきれいにしてあるだけののである。東京中の商店街の主だつたものは皆これである。

市場商店街は、ただ買ひ出しに人が出るだけの町である。これは場末の三流盛り場で、近頃この中から頭角を顯はした主なものが十條銀座である等と云ふのである。

面白いのはこの分布で、これは日本では先に申した通り大體一哩置きと云ふことにきまつてゐる。即ち半哩で圓を描いて、その真中で威張つてゐる勘定になる。尤も中心部の大きなものは一哩の圓を描いてゐる。これは東京、大阪、名古屋を問はず、どこでも同じで、これがどう云ふ所に出來るかと云ふと、東京で申すと、山の手線以内では、大體江戸時代にあつた所、乃至大きな橋のたもと、寺の前等である。山の手線内の盛り場は大體明治に完成したので、明治

盛り場と云つてゐる。面白いのは山の手沿ひに上野、大塚、池袋、新宿、澁谷、五反田がある。(これは相互では一里置き) 何れも實に盛であり、商店街盛り場以上である。これは震災後の郊外発展に伴ひ山の手へ集る郊外電車が乗りかへ客を強ひて歩かせる、その爲に出来た盛り場であるから、これを私は大正盛り場、乗りかへ盛り場と名づけてゐる。交通機關と云ふ水物で育つた盛り場だから、育つには育つがその先を心配してゐる次第である。この山の手線盛り場の外に、郊外電車の驛毎に小さい附紐の様な盛り場がついてゐる。阿佐ヶ谷だの小山だのと云ふのがそれで、これは昭和に這入つて出来たのだから昭和盛り場と名づけてゐる。

さて、かやうにきらびやかに育つてゐる盛り場は、いづれ劣らぬ梅櫻であるが、これにも大小いろいろある譯で、先に申した様にやれ綜合盛り場だとか商店街盛り場などと云ふ大きな區別もさることながら、團栗の背較への都市美商店街の多いことである。それを等級別にするには、私は夜間の八時から九時ま

での平日の交通量及び地價で輕重をつける。

まづ地價で申せば、かう云ふ表が出来てくる。

東京	銀座	三、〇〇〇圓	淺草	二、〇〇〇圓
	新宿	二、〇〇〇圓	上野	一、三〇〇圓
	人形町	一、〇〇〇圓	澁谷	八〇〇圓
	小川町	七〇〇圓	神樂坂	五五〇圓
	佐竹	五〇〇圓	本郷三丁目	四〇〇圓
	鹽町	三三〇圓	三田通	三〇〇圓
	龜戸	二五〇圓	動坂	二〇〇圓
	大塚	二〇〇圓	五反田	一七〇圓
	池袋	一七〇圓		
大阪	道頓堀	四、〇〇〇圓	九條	四、〇〇〇圓
	天神橋	八〇〇圓		
京都	新京極	三、〇〇〇圓	四條	二、〇〇〇圓
	堀川	四五〇圓		
名古屋	廣小路	二、〇〇〇圓	大須	一、二〇〇圓

横濱	伊勢崎	二、五〇〇圓
新潟	古町	六〇〇圓
金澤	片町	六〇〇圓
静岡	呉服町	五〇〇圓
札幌	狸小路	三〇〇圓

この大阪の高いのと銀座の廉いのは説明がありさうだが、ともかくこれでは千兩盛り場とそれ以下とをよく區別する。又三百圓以下の盛り場ならば、その附近の人達だけが來てゐるらしいと云ふことは、前の地價の理論から出てくるのである。

つづいて交通量だが、これは大體次の様な結果になつてゐる。

東京	銀座	九、一〇〇人	鍋屋横丁	八〇〇人
	新宿	八、三〇〇人	大阪	七、二〇〇人
	上野	四、九〇〇人	名古屋	八、一〇〇人
	澁谷	三、三〇〇人	沼津	一、六〇〇人
	池袋	三、〇〇〇人	八幡	二、四〇〇人

横濱	伊勢崎	七、九〇〇人	門司	二、〇〇〇人
川崎	東田	二、〇〇〇人	小倉	二、一〇〇人
高崎		一、九〇〇人	佐世保	三、五〇〇人
濱松	鍛冶町	一、四〇〇人	熊本	二、二〇〇人

勿論一度や二度の測定ではしつかりしたことの解る筈はないが、何となく六〇〇乃至一、〇〇〇人流れてゐれば、商店街としては漸く確立して來てゐると思はせるし、五〇〇人以下では問題にならぬことが解る。又二、〇〇〇—三、〇〇〇人となれば押しも押されぬものであり、七、〇〇〇—一五、〇〇〇人となれば優に地方の中心、一〇、〇〇〇人に近くなればどこの何と云ふ名盛り場だと云ふ様な目安になりさうである。

餘興であるが、私はこの交通量と地價正式を造つて見た。

$$L = 0.06F + 0.03F^2$$

「は最高地價坪圓であり、Fは夜の八時から九時迄の交通量を千單位で表したものである。このやうにして輕重をつけ、盛り場の分布を眺めると、誠に大

東京も美しい構造をもつてゐることが解る。嘗ての歌人與謝野晶子が、劫初より何とやらし大殿堂に我と云ふ黄金の鋌を打つのだと、自らを詠嘆したことがあるが、劫初よりの感じは別として、誠にこれこそは大東京と云ふ殿堂に打ちつけた黄金の鋌、それも一つ一つが精巧を極めた鋌と云ふ感じがする。

さてこの美しき黄金の鋌も具さにこれを見ると、一定の構造を有つてゐる。その長さが銀座八丁と俗稱されるとほり、八丁であることは全國恐らくは津々浦浦の盛り場、或は世界の盛り場がさうであらう。盛り場が夜の公園であり野天俱樂部であれば、あのづから歩く距離が標準になるのは當然である。

盛り場の道幅、これはいろいろで、第一電車路にあるのと路次になつてゐるのとある。電車路にあるのも銀座、新宿、名古屋の廣小路の様に、歩道のあるのや、金澤の香林坊、福岡の中洲の様に電車路の中にあるのやいろいろある。勿論この中洲や香林坊は高級品と云ふ譯にゆかない。

ギンブラをやりながら背に風穴があくのが氣になる様ではギンブラにならない

い。新宿も近頃は歩道が歩けないで、皆電車道を歩く様になつた。そろそろ風穴が心配だ。歩道をつけるなら、外國の様に五間はほしい。日本の道路はどうも車道主義で、道路なんでものは鐵道の退化したものだ位に考へてゐる。歩道は線路沿の工夫の見廻り用の路だ位に考へてゐる。これでは問題にならない。この歩道がせまいと云つたら、そんなら夜店を取り拂へと云ふ説が出た。何でも世の中はつまらない程真面目だと思つてゐる。話にならない。夜店あつての盛り場、盛り場あつての都市である。女房も貰はず子も産まず、人の錢勘定をして一生涯だと云へるか。ふざけちやいけない。

私は今逆に銀座と新宿から電車を除いて静かな氣持のよい市民俱樂部を造りたいと思つてゐる。尾張町の交叉點へ噴水を噴き上げ、そこでよつぱらひが晝寝してゐても氣にならないことになつて初めて銀座である。私はさう云ふ意味で、横濱の伊勢崎町、大連の浪花通の様に、歩車道をつけながら斷然夜の車を止める意氣を喜びたい。序ながら浪花通の夜店は面白い。商人は決して商品臺

の向側にゐない。必ず横に居て歩道に足を出してゐる。搔拂の用心ださうだが、如何にも満洲氣分である。

路次式の盛り場は關西に多い。心齋橋、道頓堀、新京極、元町、廣島の金座、京城の本町皆然り、幅は最大六間最小三四間、福岡に壽町と云ふ幅一間半ばかりのがあるが、恐らくこれが日本に於ける最小幅員であらう。結局通る人が淋しからず混雑に過ぎずと云ふ幅が大切であらう。

幅はともかくとして、中心部に廣場のある盛り場は理想的だが日本には少い。松本の繩手、宇都宮の馬場、銚子の観音様附近、廣島の金座、あとは淺草、名古屋の大徳位のものである。南京の有名な秦淮の水邊の廣場は素晴らしい。

盛り場の方向で面白いのは東京である。山の手線までは都心に向つて放射型、それを出ると都心に對し循環型になる。理窟あり不思議でも何でもないが、ともかく綺麗である。

さて、こんな風に出來上つてゐる盛り場が動くかどうか、郊外の驛を中心と

してゐるものはともかく、その他のものは一應動きさうに思はれる。然し事實はそれ等はかなり動かない。少くも東京では江戸時代の盛り場が江戸の末天保を區切りに殆ど全滅した。然し明治になつてぼつぼつ出來たのは殆どそのまま江戸の場所である。只新しい盛り場がどつちへ出來てゆくか、これは移ると云ふのではないが、分布上の變異であるが、これは變る。例へば江戸時代には初め人形町に出來、兩國、神田、上野と、漸次東へ移つた。終には神田の盛り場が筋違橋から講武所へ出て、秋葉原から佐竹へ移る等と云ふ細かい藝までやつて、東への氣勢を示した。これが明治になつてから急に西漸し、神樂坂、銀座を切掛に武藏野原をかけた譯である。これはいづれも他なし、大東京の廣りに従ひ、その占領の目標として移つて行つただけのことである。盛り場の本當に動いた例は、廣島、富山等で著しい例を見たが、名古屋でも鍋屋町だとか、圓頓寺等と云ふのがいづれも電車を越して郊外へ迂つた。これは郊外の重さに呼ばれた譯である。

さう云つた意味で、もし都市全體が動く様な時、中心盛り場は動く筈だ。そして都市は山の手に向つて大きく動く慣性をもつてゐるとすれば、中心盛り場は山の芋の様に丘を慕うてその方面に動く筈だと豫言する。中心盛り場と丘を結んでどうもその方面に中心盛り場の繁華が傾いてゐる所があるとなつたら、御喝采を願ひたい。少くも名古屋の廣小路はその途中にある様な気がする。尤も、當るも八卦當らぬも八卦といふ。當らなくても私のせゐではない。

盛り場の味はひ方として、關西になくして東京にだけあるものに夜店がある。東京の盛り場は殊に夏場になると、どの盛り場も皆夜店をもつてゐるが、面白いのはこれが實に敏感に後背地の氣分を反映する。例へば銀座は玩具、骨董品が多い。神田では古本夜店が六十軒も出る。龜戸へ行くと古靴、道具、ズボン等を賣つてゐる。尾久では殆どバリの蚤の市の様ながらくた道具の夜店が集る。實に面白い。

四 大東京計畫の特異性

以上漠然申上げたこと、或は申上げ損つたが申上げる積りであつたことをここで二三にまとめると

イ、大東京は帝都である。

ロ、大東京は日本の機能の中樞である。

ハ、大東京は大き過ぎる。

この中のイとロは結局ハの中の計畫に含ませることが出来る。

まづ大東京は大き過ぎる。これは盛り場の所でもその害の一端を申上げた。いはば精神的に缺陷がある。又これは皆様既に御體驗のことであるが「大東京は大き過ぎる」。その結果交通問題は日々皆様のその眼で御覽の通り。これは勿論人口に比例して混雑が増すのだから、將來はどうなることか解らない。又大東京が大き過ぎることは當然人口密度に響く。どこかの國の統計であつたが、

市民のもつてゐる部屋数が少くなる程子供の目方が減る。それを小學校の子供について計つたが、歴然と部屋數に比例する。従つて密度が大となる程目方がへる。又背の高さも減ざるさうである。都會の子供の色白で美しいのも密度で痛められてゐる加減かと思ふと恐しい氣がする。その他工業能率から云つても、防空から云つても、何から云つても過大都市は有害である。これはもう論議され盡した。そこで問題はこれを分散させてしまふと云ふことと、このまま救済する方法と二つある。いづれをとるやと云ふことになる。

(一) 大東京の分散

恐しいことが平氣で云へる世の中になつた。昔の人が聞いたら我々を氣が違つた人物ではないかと思ふだらう。これを云ひ出したのは一九〇〇年英人のハワードで、彼はロンドンの害悪を痛感し、これを救済するにはロンドン市の中から工場を外へ出し、その外へ出た工場を中心に人口三萬乃至十萬の小都市を造る。この小都市は人口を十萬以上に殖さない。その爲に周圍に農業地域を繞

らすと云ふ田園都市を提唱した。これをロンドンから一時間ばかりの所にレッチヒオース、ウェルキンと云ふ二つの田園都市となつて實を結んだが、結局それ切り出來ない。悪口屋は田園都市の理論には間違ひがある、その證據には三十年もかかつて二つしか出來なかつたのではないかと云つてゐるが、そんな皮肉は別として大ロンドンのまはりに人口二、三萬の都市が二つ出來た位では何の解決にも救済にもなるものでない。結局流行のヂェスチユアと云ふ程度に過ぎない。

然しさればとて、この大都市の分散に對するハワードの注意が都市計畫から消える譯のものではない。これは精神としては常に都市計畫屋の頭の中に動かざる指針となつたが、如何せん大都市と云ふ現象體は一國の政府と雖も如何ともなし難き強さをもつてゐる。我々が色鉛筆で地圖を塗つた位でビクともするものではない。これを徹底的に理想形態にするにはやはりナチスの強權が必要である。ドイツでは伯林は入市許可制をとつたさうで、商店の數も制限し、工

場には農村に分散することを慫慂し、もし実行するならば補助を與へ、又當分の税を減免してやらうと云ふ位に半強制でやつてゐる。ドイツは前大戦で工業が都市集中してゐてそいつをやられて困つたので、大都市論もさる事ながら國防上からもあくまで早く分散したのである。

又、大都市の分散は國民保健から云つても必要であると考へる。即ちドイツ復興の最大要素たる人的資源を上等にする爲にもこれを分散し、農村へ入れることは第一義的である。又一方大戦の経験で食糧の確立が非常に重要なことが解つた。それで農村としても強化したい。そこで都市青年を一定年期を區切つて農村の勞役に服せしめる。都市を分散し農村を強化する。それがヒトラーの方針である。彼の自動車國道は、だから頗る面白い。他の國の國道だと必ず都市と都市とを蜘蛛の巣の様に放射形に結ぶにきまつてゐる。然るにヒトラー案は都市は重視しない。國土全體、殊に農村強化に都合のよい様に配置してある。ロシアの諸計畫もきいたが、結局どうもドイツがあらゆる點から最も理論的な

立派な仕事をしてゐる様である。そして私達の最も感心するのは、かうした仕事をするのに彼等はまづ學者によつて成立してゐる立地突撃隊と云ふものを使ふ。この突撃隊によつて十二分のかたい推敲を経た所で初めて仕事を始める。他の國の様に新しいこととなると中々やらないくせに、一旦手をつけるとなる調査費は無駄だと云つて設計もなしにいきなり工事を始めると云つた非科學的なのと違ふ。この點誠に羨しくてたまらないのである。

まあともかく私達はかうやつて先輩のやられた跡やドイツの例を見、結局この理想の夢は消滅せしむべからず、さればとてナチスの強權なくして一坪たりとも實現しにくいと云ふ二つの考への板ばさみになつてゐる譯である。尤も困つた困つたと云つてゐる譯にもいかないので、最近窮餘の一策として無理かも知れないが出来るだけの事をやつて見ようと云ふので、東京の人口を或所で押へるその爲にそこは幅の廣い緑地の帯を繞らすと云ふことを考へ始めた。幅一哩位な緑地の帯を大東京のまはりに繞らす。さうすると今度は苦しがつてその

内側の人口の密度が増す。それを防ぐ爲にその近い附近の居住密度を小にする。百坪の土地に二十坪位しか家が建たないと云ふ様な區域を造る。

又武蔵野だの小金井だのと云ふ折角の住宅地としてよいところへ工場が亂設されることは、土地の價值を下げるばかりか大東京の人口制限から云つて大問題である。そこでむしろかうした土地を理想的な住宅地として育て、立川あたりを工業都市とする。言はば衛星都市を創設する。立川、浦和、船橋などを、育てるやうに保護する。こんな考へはぼつぼつ實際化し、いろいろな案となつて研究されてゐる。

然しそんなことを云つてゐる傍から、埼玉は川口を、千葉は市川、神奈川は川崎を大工業地として育てるべく全力を傾注してゐる。地理から見ればこれ等の都市は既に東京そのもので、いくらしみつたれて人口制限等を叫んで見た所で大切な所で水が漏れてゐるのでは話にならない。大きなことを云ふまへにまづこれ等の都市を東京の統制に吸はせる必要がある。その爲には行政區域の變改

が必要だが、それは云ふべくしてなかなかあいそれと出来ることでない。そんなら残つてゐるのは地方計畫法を早くつくつて地方計畫によつて一體として考へると云ふことであるが、さう云ふ法律が出来たところで、果して川崎に向つてお前の町では工場をその位にしる、市川に向つて工場は止める、埋立はするな、——そんなことが云へようか。それは云ひたいが云へさうでない。

實にかうなると、ヒットラーは偉いものだと言ふことがはつきり解つて来る。オーストリアを併合しチェッコを呑み込んだあの腕なくして出来ることでない。私をして云はしむれば、英佛はベルリンに入市許可制を布いた時、この男はオーストリアがとれると氣がつくべき筈だつたと思ふ。チェッコをとるよりも工業分散は、はるかにかたいものと私は思ふ。

少し話が大袈裟になつた。まあ國民としてこの邊の我々の心意氣をお推察願ひ、我々の爲さんと欲してゐる仕事に御支援を願ひたい。又結局一切の行政は理想に歩一步近づくものである。今は出来ない、今は出来ないが他日はそこへ

近づく、だから東京の明日の姿は御約束出来ませんよと云ふことを御注意申上げ、東京の明日はかうしたユートピアみたいな中に案外語られてゐるかも知れない、と云ふことを申上げて置く。これで物騒な大東京分散事件は終結とする。次にはおだやかな「この儘よくする」と云ふ、どなたにもお褒め願へる、その代り又頗る頼りのないお話を申し上げよう。

(二) 改造方針

人口を分散せずして大東京を改造する。その方針は、當然冷却して行く市民心理の回復、保健状態の回復、交通能率の回復、生産能率の回復でなければならぬ。勿論これを全部満足に解決することは出来てゐない。出来るだけである。そして、これの最も萬能な方法は、結局これを小都市の結合體にしてゆけば宜しい。何をするにも、一々都心まで出なければならぬと云ふのはいけない。又どこへゆくにも都心を通らなければならぬと云ふのがいけない。即ち全東京を幾つかの小都市らしい塊に分ける。例へば區を中心に分ける。そして

大抵なことはその區の中で用が足りるやうにする。これは市民の心をひとまづ一區で纏め、そこに一つの心の故郷が出来るとのみならず、いらざる交通が起らないやうになる。これは市民心理を暖めることにもなり、又交通の緩和にもなる。小都市化の次は都市全體を區分し、これを工業なら工業、住宅なら住宅と云つた區分にはつきりさせる。特に工場の如きは輕工業、重工業、或は材木工業、機械工業と、これも判然と分けて集團させる。これは産業能率を増すことになり、同時に交通の錯雜を防止するよすがとならう。

そして實際はこんなことではまだ不十分だから、この外に保健設備や交通計畫のいろいろな技巧を加へ、更に又最もむづかしい精神結合をはつきりさせる爲に、中心意識を呼び起す様な施設をする。かうした技術方面の事をはつきりさせると、次の様になる。即ち

分化計畫、精神中樞確立計畫、保健計畫、交通計畫

と云つたやうになる。これ等に應じ實は我々は計畫を立ててゐるのである。そ

れぞれについて簡単な解説を申し上げます。

まづ分化計畫だが、これが二つに分かれてゐる。一つは地域制の問題で、それが近頃又専用地區と云ふ様に純化してきた。これでこの専用地區が上手に使ひこなせるやうになると、本當によい都市が更生されることになる譯で、非常に喜んでゐる。

この分化計畫で私の考へてゐるのは一寸變つた方面である。私は先き程盛り場の所でも申上げた様に、交通機關と云ふ横暴ものがこの人類の花園を荒したことに満腔の不平をもつてゐる。大體交通機關は存在して宜い場所と、存在してならぬ場所がきまつてゐる。例へば住宅地、學園、官廳中心、盛り場、公園附近等、交通機關は傍まで來て欲しいけれど中へ這入られては困る所なので、私は今かうした所へ交通機關の入らぬ様、即ち離脱させる様に計畫してゐる。これは交通自體としては一應甚だ消極的な仕事であるが、都市計畫としては頗る積極的な効果の多い仕事である。ただどうも交通關係の人達の賛成を得にく

い仕事なので弱るだけである。

次に精神中樞確立の計畫は喧しい問題であるが、先程から申す様にこれが最も重要な仕事の一つに屬する。外國の都市は廣場がある。中心になる建物が見える。田園都市は大きさがきまつてゐる。日本の——しかも東京はその總てが未だして、これを何とかする。私の計畫は區役所を中心に廣場や廣小路を配置し、區の中心を造ること、神社の大きな重要なものには參道を附し境内を擴げらる。そして先程申した盛り場を安心な朗かなものにする。又これ等の中心は晝だけのものでなく夜も人々が入り出来るやうにし、特に區役所の如きは投光照明でその建物が區の隅々から見えるやうにする。これ等によつて幾分なりとも亂れ勝ちな散漫な市民心理をつなぎ止めることができよう。

ここで特に申して置きたいのは、東京が帝都であると云ふことである。畏れ多い話であるが、宮城は日本の中心である。この周圍は飽くまで聖域として淨化されなければならない。お堀の周圍、殊に帝劇前の通り等何となくうるさい

調和しない嫌なものがある。又二重橋前は日に二萬臺と云ふ自動車の通過交通も聖域としては絶対にあつて欲しくないものである。實はそれで最近これをトンネルで導く案が出来協議されたが、何にしてもあそこは日本の中心であるから十二分に考へを配らなければならぬ。どなたか警視廳側のお堀の土手を御覽下さい。凄いいケーブルがみどりの上を走つてゐて、問題にならない。この精神中樞確立の仕事は、大東京の問題ではない、全日本、今では全亞細亞に對する重要事となつてゐる譯である。

次に保健施設としては公園計畫、空地地區等が大童で活動してゐる。私は自分の擔當として道路による保健計畫と云ふのを立ててゐる。即ち歩く道路、歩きたくなる道路を拵へ、市民を交通機關利用病から離脱させる。その爲に郊外にはハイキング道路を水路沿に考へ、乗馬道等と云ふ氣のきいたものを考へたが、それより大切なのは市民が日常通勤したり交通機關の起終點まで歩きたくなる様にするこゝである。

その歩きたくなると云ふ點で日本の街路は零だ。復興局御自慢の昭和通だつてあれでは一寸歩く氣になれない。まあ出来るだけ方々に廣小路を配置し、せめて電柱だけでもとり拂ひ、美しい水ぎはを利用する爲に、水邊の水を利用しない建物なんか取拂ふなどと云ふことを考へてゐる。

考へて見ると外國は羨しい。ブラード等は全市の舗裝がモザイクである。ベルリンのビスマルク・ストラッセでは電車の軌道敷が芝生である。ウィーンのリング・ストラッセは街樹が高々と四列に、ドイツ御自慢の城路道路には所々に大理石の彫刻が配置してある。ブラッセルのリングには花壇や子供の運動場や全市全道が花祭の様に花でかざられてゐる。

かうした道路に、しかも建築は美しい。又町の中心には廣場がある。歩道では美しい老人がゆつくりと椅子にもたれて煙草を吸つてゐる。歩きたくなるではないか。かう云ふ路を見せて歩いて歩くなと云ふ方が無理である。私は何年かかるか解らないが是非日本——殊に帝都はさう云ふ道路で満ちてゐる様にさ

せたいと冀つてゐる。

さて大詰に交通計畫。これはいろいろあるが、今私がやつてゐる仕事は大體大東京改造計畫に準じたものである。まづ第一が、この市中のこんぐらかつた道路系統を整然とする。整然とする——と云ふと皆都心へ放射道路を造ることだと思ふがさうではない。一例を申せば宮城前から築地までの間の地帯の交通状態を緩和させる仕事、「山の手昭和」と云ふ先にきめた五反田から靖國神社を通り、本郷へぬける道等その一つである。然しそれだけでは足りない。

まだまだ港の方へも道がほしい。そこでお臺場を繋ぐなどと云ふ勇敢な案も出て来る。

その次が都心、東京港、新宿、澁谷、五反田等の都市からそれぞれ全市に重要幹線を放射させる計畫、これなども嘗つて考へられたことがない。これもどうしてもやらなければならない。又道路が整備されてもその上を走つてゐる交通機關が今の様に繼竿式でバスに乗り省線に乗換へ、又市内電車、次がバスと

云ふ様では何にもならない。當然交通統制が必要である。外國の大都市で日本の様に無数の會社が勝手にやつてゐると云ふ様なんびりしたところはない。單一會社が全部やつてゐるとか、その爲に特に行政機關が出来てやつてゐるとか、市が建設して單一會社に貸して經營させてゐるとか、何とかして統制してゐる。タクシイまで統制してしまつてゐる都市がある。日本でも陸上交通事業調整法が出来てぼつ／＼かかつてゐるが、私の見る所ではどうもどなたの誠意も酌み難い。道遠しの感を深くする。

日本人は戦争にだけは立派に本氣になり得る。一身を忘れて、君の爲國の爲に戦ふ事が出来る。この點無比であるが、かうした平和事業にはまだまだエゴイストで羽化登仙する術を知らない。誠に遺憾である。

さてそれへ續いては高速道路の問題が来る。このただつ廣い都市をこの儘にしておくと人間が中心部で固つて困る。早くこれを郊外に出さなければならぬ。それには郊外に好い住宅地を設け自動車なり電車なりで人口を出してやる。

電車の方は地下鐵道と云ふ方が擔任してくれるが、自動車の方は地下鐵に乗せる譯に行かない。これは立體的な高速道路と云ふのに乗せてやらなければならぬ。この高速道路に Express high way 等と洒落た名をつけたものがゐる。何のことはない。高架鐵道の鐵道の代りに、自動車を走らせるだけのことであつた。これは郊外住宅へ人を運ぶと云ふ呑氣な仕事以外に、まだまだいろんな仕事をやる。例へば、河岸傳ひに京濱の工業地帯を貫けば、貨物のトラック専用道路となつて役にたつた。

又飛行場は是非これで都心と繋がなければ大阪から飛行場まで五十分、飛行場から市中まで一時間と云ふ變なことになつてしまふ。逓信省では高速道路がなければ今に速達なんかお断りするより仕方がないと云つてゐるさうである。

更に軍用のことを考へたりなんかすると、實にこれ程萬能な仕事はない。いや、ヒットラーの故智によれば、全日本の國土計畫、小さくとも大東京を中心の關東平野地方計畫等、何としてもこれなしには出來ない譯である。尤もこれ

について一寸困つたことは、これを街路の真中に入れることは市中の美觀を損ふ。何とかしなければならぬ。そこで私は街路の片側の家屋の屋根の上にこれを走らせる。その下の家屋は従つて鐵筋の共同建築、防火建築になる、されば名案だと自分だけで手を打つてゐる。

さて、お約束の中心都市としての東京、帝都としての東京はどうなるかと云ふ大掛りな題目はどうしたか。それはかうなるのである。即ち以上の諸計畫がこれが一般都市に於てのお話ならばまあ「そのうちに」と云ふことでも済みさうである。然しこれが精神的には帝都であり、機能的には日本即東京、東京即日本であるとなると、これは一刻を争ひ眞心によつて断行さるべきだと云ふことになるのである。

この一文は昭和十四年に某大銀行の行員にお話した通記である。従つて多少今日とツレがあることはお許しを願はなければならぬ。

都市人口増加率を支配するもの

一 まへちき

都市計畫の實際に携はり、特に日常區劃整理の指導に従事するものにとつて、最も知つて置きたいのはその都市の人口増加率である。整理地の消化の難易、受益者負擔金徴收の可能性或は妥當性等を考へると、如何にそれが重要なものであるか解る。

私をして云はしむれば、それ等の事業はこの「増加率」の或數値以上の都市に對してのみこそ可能であれ、それ以下の都市に對しては妥當とは思へない。従つて相當考慮——或場合にはむしろその實施に對ししばらくの「休日」を注

意すべきではないのかとさへ思つてゐる。

然らば一つの都市の明日の人口増加率は如何に推定すべきであらうか。勿論、都市自體が既に複雑極まりなき内容によつて構成されてゐる以上、この推定も尋常の勞作對象ではあり得ない。

自分はただ實際の衝に當るものとして「結果」を急ぐので、茲に大體の常識を「確かめる」程度でこの小論を作つて見たのであるが、固より到底「公式と係數」の推定までには至り得ないので、漠然と人口増加率なるものを支配する「力」の所在を探つたに止つてゐる。それでも、自分の心は餘程「樂」になつたことを感じてゐる。

二 都市人口増加率の分布

自分はこの研究に於て試みとして頗る便宜的な一つの方法を探つた。即ち一方從來の方法により統計の結果を圖表にし、その中から曲線關係を見出すと同

時に、これを全国の地圖上にも描き、人文地理的な關係を求めた。その結果は必ずしも正鵠ではないかも知れぬが、かなり、速に何等かの途を示してくれる。まづこの方法により人口増加率を分布せしめて見る。

便宜上各都市を次の階級に別ける。

丙 級 人口増加率一%臺及びそれ以下。即ち自然増加率内外のものである。

乙 級 二%臺。

甲 級 三%臺。

この級の都市ならば大した例外なしに市況旺盛である。

超 甲 級 四%臺及びそれ以上。云ふまでもなく頃る良好状態にある都市である。

まづ甲級都市により大勢は察せられる。超甲級はさうして恰もその重點の如く強勢部を示すべく存在する。次の如くである。

北海道 旭川、小樽、○札幌、函館。

東北地方 表日本。○青森、八戸、盛岡、○仙臺、郡山。

裏日本。山形、新潟。

中部地方

表日本。關東平野||足利、○桐生、前橋、高崎、八王子、○甲府、○川崎、○千葉。○

東海||○沼津、○清水、靜岡、○濱松。○愛知平野||豊橋、岡崎、○瀬戸、○一宮、○岐阜、大垣、宇治山田、○名古屋。

裏日本。松本。(裏日本と云ふべきや否や問題。經濟上はむしろ愛知平野に屬すべし)。

西部地方

表日本。攝津平野||堺、大阪、尼崎、西宮。○中國||廣島、○宇都。○四國||○徳島、○今治、高知、宇和島。

裏日本。米子。

九州

北九州。大分、○別府、小倉、○八幡、○戸畑、○福岡、佐世保、久留米。

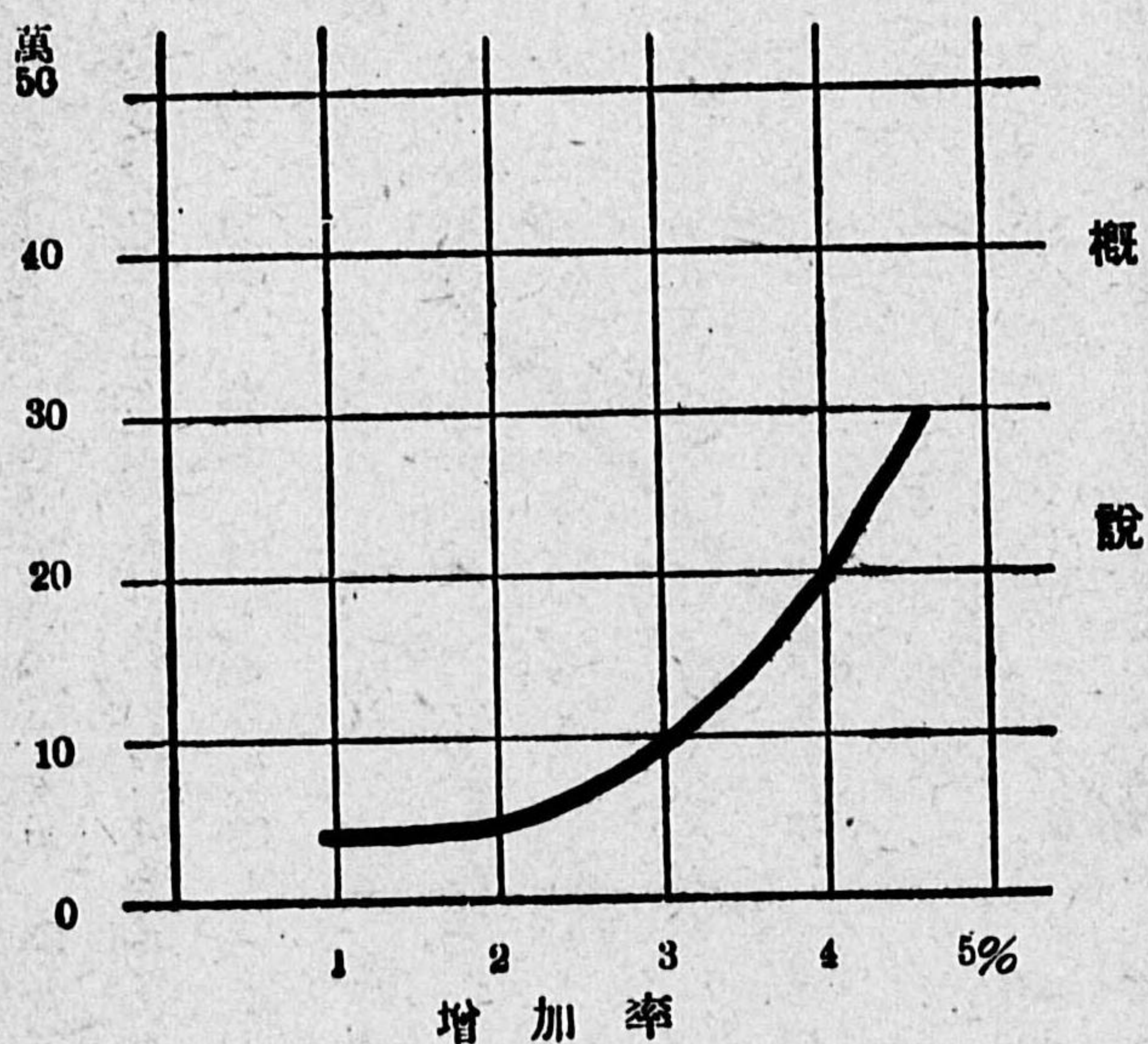
南九州。○宮崎、都城、鹿児島。

(無印は甲級。○は超甲級)

今これを綜合すれば次の結論を得さうである。

- 一、北海道を別として日本の都市人口の増加は殆ど表日本に傾いてゐる。
- 二、表日本に於ける人口増加の重心は關東平野、愛知平野、攝津平野の三平

人口の増加率の関係曲線 第一圖



三 都市の大小と人口増加率の関係

大なる都市は人口吸引力が大きく、小都市程その力が弱いことは、特に十八世紀來の都市人口を論ずるもの間に常識とされてゐた程である。然し知りたいたいはいかなる比率に於てこの二者——人口量と人口増加率が關係を保つかである。「漠然」より多少の「確か

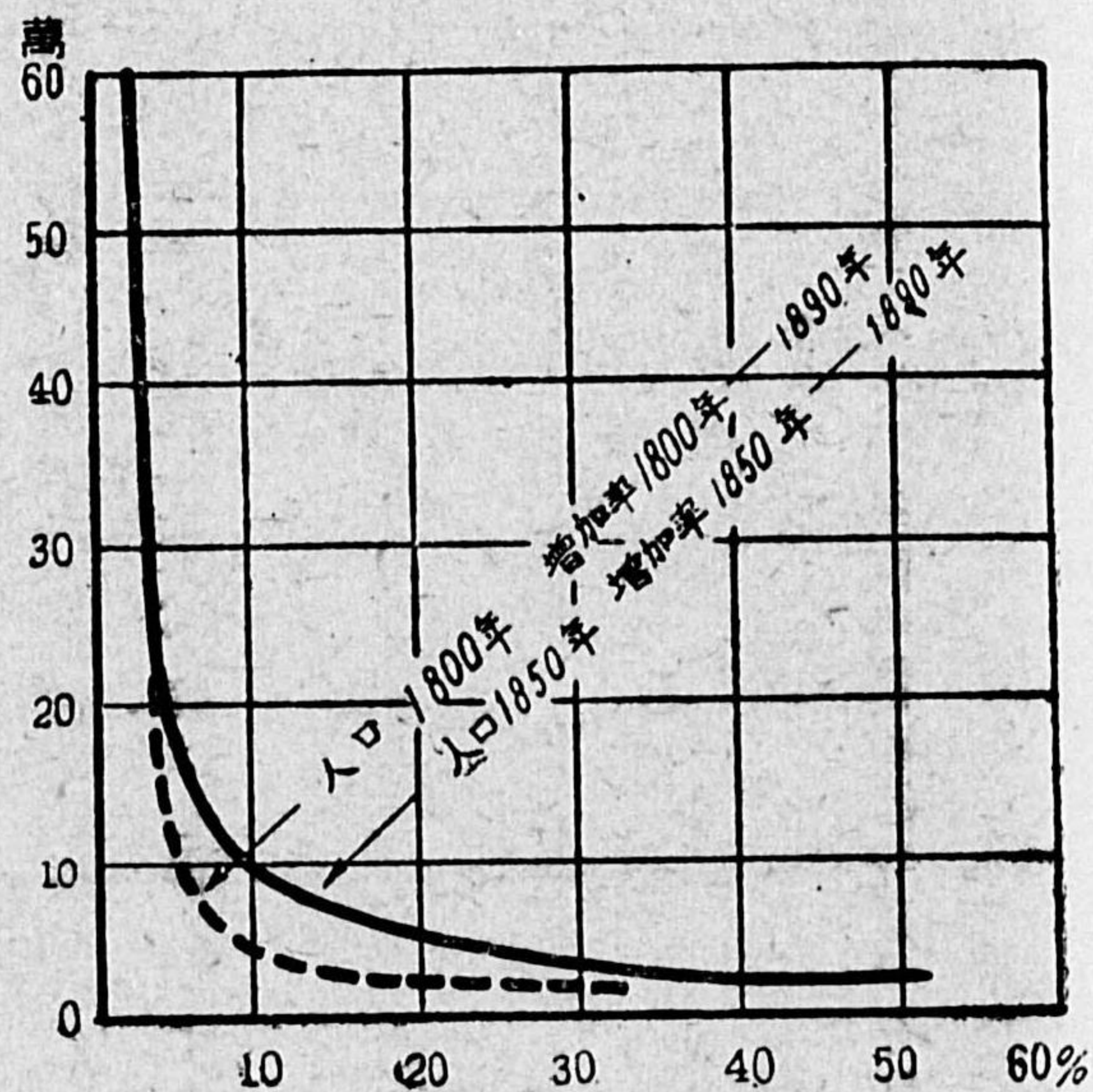
野及び東海道を連ねる一帯にある。特にその中樞は愛知平野より東へ東海道に沿うてゐる。他の一つは北九州にある。

三、關東、愛知、攝津、三平野の都市人口集中模様は、各特徴がある。關東に於ては、人口は中心部に一つの集中中樞を造り、他はことごとく西北の平野縁邊の都市に傾く。攝津平野に於ては、殆ど大阪を中心に集中。然るに愛知平野に於ては漫然、全平野に渡つて増加してゐる。

四、攝津平野以西に於ては、北九州の集中が周知の理由によつてなされる外に、他の増加率大なる都市が大體、陽あたたかく静かなる海に面してゐることは一つの特徴であらう。

乙、丙の都市については、例へば(一)丙級は大阪、石川兩地方より以西に明かに分布し、(二)乙級は中部日本を除き均等である等より以外には餘り記すべき結果が出ない。

歐洲各都市人口増加率人口量關係曲線

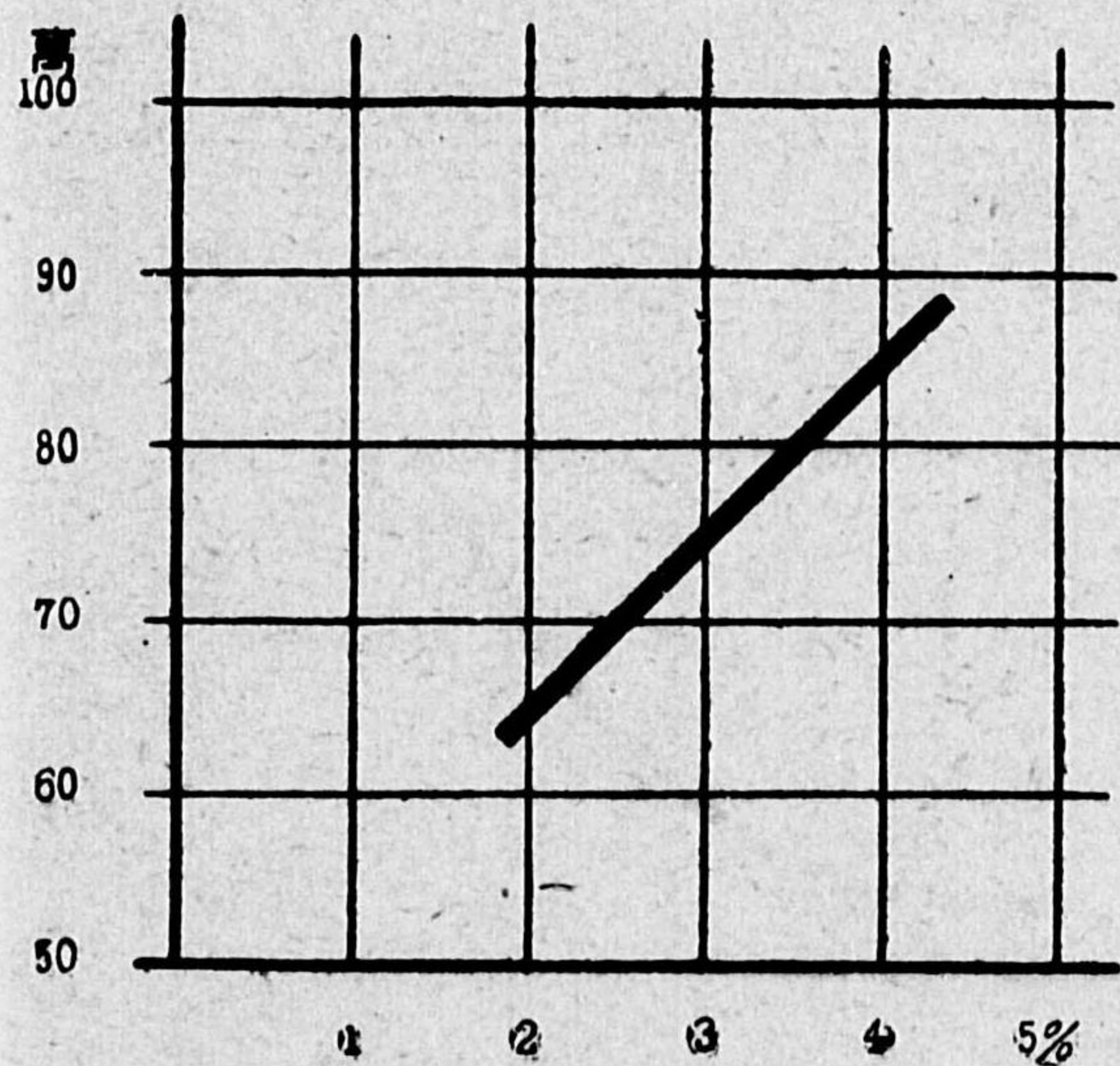


ここでは人口増加率は都市人口の大きさに逆行してゐる。

直に一般的な断定は許されさうもないにしても、ともかく、日本の現在に於ては都市の大小と人口増加率は相伴ふものであると云ふことだけは頗る臆氣な

らしいことは解る。ただこの際不思議であるのは第三圖で、これは Weber の著書の中から得た資料により十九世紀歐洲各都市の人口及増加率關係を示したもので、過去の時代のことではあるが（この曲線は又頗る明快に描ける）明らかに

第二圖



まづ第一に日本都市年鑑より得た各都市の人口量とその増加率の相關を圖上に描いて見る。その結果は頗る捕捉し難いものになるが、あへてその中より曲線關係を見出すならば、第一圖第二圖の如きものを得る。第一圖は小中都市を支配する曲線、第二圖は大都市を支配する曲線で、この間の關係は絶たれてゐるらしく見える。

いづれにせよ「人口増加率は、都市の大きさに應ずる」

50」へ進みます。

がら解る。

出生、死亡、移出入の各率より

然し、これだけの結果では何となく満足し得ない。進んで今度は出生率、死亡率、移出入率等の増加率内容に付き考察をめぐらして見よう。

まづ人口増加率の構成は次式で表はし得るとする。

$$P = (B - D) + (I - O)$$

P = 人口増加率

B = 出生率

D = 死亡率

I = 移入率

O = 移出率

但し孰れも 1000 人に對し

この内容を吟味すべく、全國各都市につき、それぞれの率を算出し、(都市年鑑より) 圖表に描くと次の結果が出る。即ち出生、死亡は都市の大小によつては殆ど變化がない。(これは大都市程強健な人口を吸収し、しかもその衛生設備

が年々改善されてゆくものであることを示すらしい。これについては Weber も同様のことをのべてゐる)。

然るに移出入の差による増加は、人口の大小と一種の比率を保たうとする。明快な關係を得ることは頗る至難であるが、それらしい傾向はともかく彷彿し得る(明快な結果を得せしめないといふことは、他に多くの影響體が存在することを示すのであらう)。

この移出入率及人口の大小の關係を更に判然せしむべく、愛知縣各都市につき研究して見ると、更に次の結果を得る。

愛知縣各都市、出入寄留及人口曲線間の係數比率

名 古 屋 市	人 口	入 寄 留	出 寄 留	昭 和 五 年 増 加 率
大正六年以後	四・八	一	一	四・九
大正六年以前	四・五	四・〇	一	一
豊 橋 市	六・七	五・七	一	五・一

岡崎市	八・〇	五・〇	一	三・二
一宮市	七・〇	四・〇	一	五・五
瀬戸市	五・三	四・三	一	四・五

(名古屋市は明治三十一年以降現在に至るもの。一宮は大正七年より昭和元年。他は大正十年より昭和五年に至る各十年間 各市役所調査)。

數値は總て各都市に於ける各曲線の曲率を出寄留を一として計算したものであるが、これにより、(一)出入寄留の關係は大體一定なるも、(二)人口對出入寄留の關係は人口大なる程接近するといふ結果を得る。

勿論出入寄留數の如きは人口統計の中最も憑據しにくいものであるとするも、各都市のそれを比較すれば自ら真に近い傾向がうかがへるとしなければならぬ。ただ當初自分は、入寄留は人口に比例し出寄留はこれに逆比例するのではないかと云ふ推定を立ててゐたのであるが、それは得られなかつた(或は材料不足かも知れぬ)。

かくして、ともかく、上述の式は次の性質のものであることが解つてゐる。

$$P = (B - D) + (I - O)$$

$$= \text{恒數} + KP$$

$$K = \text{寄留}$$

然るにこの恒數たる自然増加率と移出入による増加率との割合は、全國各都市に於て平均二・五(最小〇・一最大一〇・七に至る百四都市の平均)になる。即ち自然増加率は全増加率の約三割に近き大部を占め、しかも恒數であるとするれば、假令移出入による増加率が全増加率を都市の大きさに比例せしめようとしても、結果はかなり感度の鈍いものとならざるを得ない。かくして「人口増加率は都市の大きさに應じて増大するらしいが明快な比例はしない」と云ふ内容が、稍判明して來たわけである。

ついでながら、生、死、移出入各率の地理學上の分布状態を見ると、

- 一、出生率は、愛知、石川、兩縣を南北の境界とし東部全體に大。
- 二、死亡率は、南九州、兩津、關東、兩平野及東海道を除く他の部分に分布。

- 三、従つて自然増加率は當然の歸結として北九州及前記攝津、關東、兩平野及東海道の地帯に多い。
- 四、集中率（人口増加率より自然増加率を減せるもの）の大なるも亦前者同斷地帯。
- 五、自然増加率と出生率との比は、愛知以西。

と云ふことが解る。（但し、出生率は千人に對する三〇人以上、死亡率は二〇人以上、集中率は三〇人以上を取つた。）

その二に於て東北地方の増加率が割りに大であつたのは出生率の關係であり、従つてそれが一種の見掛けの増加であり、關西地方に丙級の多いのは死亡率に支配されてゐるので、従つて、眞個の増加率は、もつと大きい筈であることが解る。

118

いづれにせよ、三大平野及び東海道を結ぶ一帯の増加率の價値は動かない。

大都市の地理的分布より

次に今度は都市を大きさにより地理的に分布し、増加率の分布模様と對比を査して見る。

- 一、人口十萬以下の都市は全國均等。

一、十萬以上五十萬未満の都市もほぼ均等ではあるが、大體この級の都市は海邊である（殆ど全部と云つてよい）。

- 一、五十萬以上の都市は關東、攝津、濃尾の三平野で占めてゐる。

「五十萬以上の都市」以外の場合には全國均等で、明快な傾向は示さない。これは此の級まではあくまで都市の「大きさ」以外の他の力に影響されてゐることを示すのである。

そして、都市人口の重心としての五十萬以上の都市が人口増加率の分布と合致し、東海道を中心に關東攝津兩平野の間に集められてゐることは、漸くそこに「何等かの力」が働き出したことを示すものでなければならぬ。

とまれ、この場合はこの方法によつては餘り香しい結果は得られなかつた。

關東、濃尾、攝津平野について

地理的研究の副産物として、自分は頗る奇異な結果を得た。それは、別表の如き、都市の分布である。即ち明らかに、そこには平野の中樞たるべき都市を

119

めぐつて同級の都市が圓陣を描いてゐる。(自分はこれを都市の花輪と名づける)しかもそれは、中心都市が人口大なる程、同心圓の半径は大きくなる。關東平野の如きは半径二十五里にして、初めて獨立性ある都市を存命せしめる。これは明らかに、都市の大きさによる吸収力の差異あることを示すものでなければならぬ。

或はこの母都と花輪との間に、もつと的確に表示し得る様な物理的な相關がありはしないか。これについては、他日の研究を期して置きたい。

以上は單なる人口の大きさ及び布置の關係であるが、これを人口増加率から見ると、前述したやうに、

- 一、攝津平野に於ては大阪を中心とし、頗る近接して、増加率大。他は小。
- 一、關東平野に於ては花輪の一部、及び東京郊外(これは地理學上の東京市)の増加率大。他は小。
- 一、濃尾平野に於ては均一に各都市とも大。

と云ふことになつてゐる。

Weber の云ふ所によれば、農村人口が都市に移入する場合は、一まづ小都市へ、それから中都市、大都市へと漸進するさうである。この三大平野の人口増加率の分布状態は、關東が既に農村人口の集るべきものは集め盡し、濃尾が目下小中都市動員をやつてをり、攝津がその中間を行つてゐる。さう斷ずべきではないのであらうか。いづれにせよ面白い現象でなければならぬ。

これ等は人口増加率を支配する「力」そのものを直接に説明するものではないが、いつかは暗示する。即ち都市人口増加率は都市相互の距離及び相互の量の關係によつても左右されさうであると云ふことを暗示するのである。くれぐれも他日の研究を約束したい。

三大平野都市相關の表

平野	中心人口	三五里	人口	八里	人口	十五里	人口	廿五里	人口		
都	市	人口	都	市	人口	都	市	人口	都	市	人口

關東	東京	二〇七	川崎	一〇	千葉	五	岡崎	七	四日市	五	大垣	四	津	六	前橋	八	宇都宮	八	水戸	五	甲府	八	高崎	六	桐生	五	足利	四
濃尾	名古屋	九一	瀬戸	四	岐阜	九	伏見	三	岸和田	四	豊橋	一〇	一宮	四	和歌山	三	明石	四	京都	七七	奈良	五	神戶	七八	西宮	四	大阪	二四五

四 商業と人口増加との關係

概 説

都市と商業との關係は緊密以上の緊密でありながら、その相關を數字で表はす事は又頗る難事である。手がかりがつかない。

これも Weber の著に例をさがすならば、後出、獨逸都市の「大小による職業別比率表」により、人口大なるほど歴然と商業人口が多い。しかるに同書には前述したやうに、増加率が、都市の大きさと逆に動いてゐることも表示してある。

この二つの結果を綜合すると、少くも十九世紀歐洲都市では商業人口の比率は人口増加率とは逆に組み合つてゐたやうである（商業比率大なる程人口増加率は小に）。甚だ商業にとつて不利な結果であるが、これを甚しく通俗に考へて見ても、商業は少くも工業に比し従業員の多數を要せず、且一定地域に於ける

農業の中心機構としての商業は工業に比し發育に限度がある。

従つて本質上、人口増加率とは親しさが薄かるべきこと當然であるが、何と
しても逆行すると考へることは常識を超える。これは當然、少くもこの Weber
の場合だけは「他の力」が存在し働いてゐたものと考へなければなるまい。

都市とは當然、少くも資本主義社會に於ては商業機構の意味でなければならぬ。従つて、工業都市と
稱して、そこに商業の1%をも有しない町はない。然し、逆に又、商業は結局「手段」であるところ
から、農、工そのいづれかの背景を有たぬ商業都市も存在し得ないであらう。

従つて商業と云ふ角度から都市を分類すれば

農業地を後背とする商業都市

工業を母體とする商業都市

交通衝に寄生する商業都市

となる。上述はかかる意味での商業及び工業と云ふ言葉を略し用ひたに過ぎない。

ともかくこれは、更に地理的考査を必要とするのである。

地理的分布より

商業と人口増加率の關係を地理的に見るには、地價と結びつけて考へるにし

くはない。

各都市の最高地價をその都市の人口で除し、人口一人當りの數値を地價指數
とする。これが五厘乃至一錢五厘の間であれば、その都市は地價的に甲級都市
であるとして、この全國に於ける分布状態を見ると、

一、殆ど表日本に集る

二、濃尾、攝津兩平野及び東海道筋に最も多し

三、瀬戸内海沿岸も亦佳良

と云ふことになる。云ふまでもなく地價指數は商活動を示すのであるから、日
本の商業もこの地帯に於て旺盛なることを意味する。これと人口増加率分布状
態と比較すると、両者は内海沿岸及び關東平野に於て差異を示す。明らかに地
價の場合は西に傾きを見せ、人口の場合は東に濃きを見せる。これは全く商業
の支配力の弱さの片影を示すものであるが、少くも表日本及び三大平野、東海
道を結ぶ一帯に於ける狀況は兩者全く同じである。従つて、日本の現在に於て

は商業は人口増加率を支配するとまで行かずとも、或る親しい關係を保つてゐることが解る。

ただここで自分は直に、然るが故に日本に於ける商業が人口増加を支配する力の主因となつてゐるとまで斷じないのは、或は、ここに「工業により人口増加率が支配され、その人口増加率により商業が刺戟されてゐる」と云ふ説明も想像出来ないでもないからである。少くもこの推定は、商業により工業が支配されるであらうと云ふ「逆」の場合より問題にならぬ程強い。

概説で一寸のべたところによつても、工業——人口——商業の配列の方に妥當さを認めざるを得ないやうな氣がする。あへて云ふなら商業は人口増加率の副因となり得ると云ふところであらう。

五 農業と人口増加率の關係

勿論農業を領域としない商業も考へにくいが、特に農活動の盛んな地帯に於

て都市人口増加率は如何に刺戟されるか。これを「都市地理研究」所載の川口丈夫氏論説「米の集散と都市」と照應すれば、特に中部日本に於ては皮肉にも丁度人口増加率の最も少い部に於て最も豊富に收穫されてゐることがわかる。明らかに米と云ふ様な生活資源の所産が、そのままでは人口増加を支配し得ないことを示すわけである。

六 工業と人口増加率の關係

概 説

工業こそは人口増加率を支配するであらう。これは工業そのものの性質上自明である。都市年鑑より全國各都市の工業額を採録し、これを各の人口で除する。この一人當りの工産額を工産指數とし、これと各人口増加率とを圖表にし、相關を探れば漠然ながら（甚しく漠然ながら）この両者が併行して進むことが解る。

これを最も簡約すれば更に、

$$\frac{\text{工産指数}}{100} = \text{人口増加率}(\%)$$

とさへ云つて差し支へなさうである。勿論、圖表面が漠然としてゐることは他のものの影響が多少存在することを示すと見なければならぬ。

工産増加率より

次に尙幾分の詳しさを得べく、工産増加率との関係を見る。

資料を得る便宜上、これを愛知縣五都市について檢すれば、次の様になる。

- 一、名古屋市——大正十四年までは工産人口兩増加率線は殆ど併行して進むが、この年即ち人口七五萬の附近より人口線の方が上昇し始めた。工産はそれに關せず直進する。
- 二、豊橋市——昭和元年まで併行して來たが、ここで俄然前同様人口線は上昇。工産線は直進と云ふ形になる。
- 三、一宮市——大正十四年を境として大變動もあるも、少くも昭和四年以前に於ては上昇下降、通覺すればともかく一つの上昇直線になる。そしてこの人口線と直線化されて、工業線は明快に併行する。

四、岡崎市——工産線の波動甚しく、しかも、これを直線化すれば年と共に總額に於て減退すると云ふ奇現象を呈してゐる。然るに人口線は平然として上昇の一途にある。

五、瀬戸市——本市の統計は大正十四年以降しか手元がないが、その結果は工産、人口いづれも明快なる直線。しかも併行して上昇してゐる。

この三河部都市豊橋岡崎の人口増加率線の單獨上昇について、自分は各方面に亘りそれが何の倒影なるかを模索したが、結局見當がつかねた。ただ猪間氏著「日本經濟圖表」等により按ずれば、經濟圖表五四表自作農、小作農及び不在地主戸數に於て、大正十三年より昭和二年にかけ特に小作農の數のみが激減してゐることが示され、又、五五表耕地廣狹別所有者戸數に於てはこの間に三町歩以上の所有者が減り出してゐることが解る。五六表、農家の收支より見ると大正十四年は農村受難の年と見なければならぬ。

従つて上述の現象は、三河部山間の農民が離村し都市逃避を行つたことを意味するのではなからうか。首肯しがたいことながら、さう考へても見たくないのである。とまれこの考へにより修正すれば人口増加率及び工業増加率は明ら

かに親近關係にある。

地理的關係より

續いてこれを地理的分布から考査する。

工産指數一人當り三百——二百圓代を甲級、四百圓以上を超甲級として、全國に於けるその分布を見ると左の如くなる。

北海道 甲級なし。

東北地方 表。若松。

中部 表。關東平野——○桐生、八王子、○川崎。

東海道——濱松。

愛知平野——岐阜、○岡崎、○一宮、○四日市、○名古屋、○津、宇治山田。

裏。○福井。

西部 表。攝津平野——大阪、堺、○岸和田、○和歌山、神戸。

中國——○倉敷、○福山。

四國——なし。

裏。なし。

九州 北九州——中津。○戸畑。○久留米、大牟田。

(○印は超甲級、他は甲級)

即ち結局、北九州、濃尾、攝津、關東の三フォーカルポイントに集中し、それ等を重心として「帯」が成立してゐる。即ち殆どこれは人口増加率の分布状態と一致する。かくして工業對人口増加率の堅固な關係は完全に證明された。

この兩者は明らかに有機關係にある。

七 以上の結果による再考査

以上都市内容と増加率の關係を考査して來たが、これ等の結果よりして、先に考へた都市の大きさと増加率の關係を更に正確に説明する事が出来る。

即ち都市はその大きさに伴ひその内容を異にする。十九世紀獨逸都市は別表の如く、都市の大きさに比例して商業人口の比率を増加してゆく。(工業は全獨に飽和してゐる)。現代日本では、濃尾平野に於ては別表の如く、(資料の得らるる限りに於て) 少くも、都市の大小は直に工業人口の比率にひびく。よつて、

工業人口が恒数であり、人口に比例して商業人口比率の殖えて行く性質の歐洲十九世紀都市に於ては、商業の人口増加率支配力の性質上、都市の大きさが直に増加率にひびき得なかつたし、人口に比例して明快に工業含有量を増してゆく日本の都市に於ては、都市が大きくなると同時に狐疑なく人口増加率も増えてゆくのである。

尤も都市内容として人口増加率刺戟力に乏しい商業が三割をも占めてゐる事は、さう明快に都市の大きさをして直ちに人口増加率の専制君主たることを許さない。——前述した通りである。

獨逸都市内容職業別比率表（一八八二年の調査）

人口	商	工	農	日傭	自由業	不明
一〇萬以上	二六・二	四七・三	一・四	五・〇	一〇・七	八・九
二——一〇	一九・五	五二・八	三・四	四・五	一一・二	八・六
〇・五——二〇	一五・六	五三・六	九・五	四・三	九・一	七・六
〇・二——〇・五	一一・六	四九・〇	二六・三	二・九	四・九	五・四

田舎	四・九	二四・四	六四・五	〇・七	二・三	三・七
全獨	一〇・〇	三五・五	四二・五	二・一	四・九	五・〇

（ウエバアより）

名古屋附近中都市内容職業別比率表

類	戸	昭和元	商	工	農	日傭	自由業	交通
一ノ宮	大正十三	三・一	三・九	〇・九	〇・六	〇・六	〇・六	〇・四
	大正十三	三・一	四・十	〇・九	〇・六	〇・六	〇・六	〇・四
	昭和元	三・一	三・八	〇・九	〇・六	〇・七	〇・七	〇・四
	昭和元	三・一	三・八	〇・八	〇・六	〇・七	〇・七	〇・四
	大正十三	三・二	三・七	〇・七	〇・七	〇・八	〇・八	〇・四
	大正十三	三・三	一・二	二・三	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六
	大正十三	三・三	一・二	二・二	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六
清水	十四	三・四	一・二	二・二	一・四	〇・六	〇・六	〇・五

（その他有職者）

日本全國職業別人口比率表

年次	農	工	商	自由業	その他有業
明治五	七七・一	三・七	六・九	〇・五	九・四
明治九	七七・二	三・七	六・七	〇・八	九・五
大正九	五一・八	一九・四	一一・七	四・二	一九

(猪間誠一氏編日本經濟圖表)

(資料は總て當該町役場の好意による調査)

市町村	農	工	商	自由業	その他有業
稻澤	二、七〇〇	二・一	〇・九	五・四	—
古知野	二、三〇〇	三・三	〇・四	六・三	三・〇
蟹江町	二、一〇〇	二・三	〇・三	五・三	—
知立	二、〇〇〇	二・一	〇・四	七・五	—
未曾川	一、八〇〇	一・六	一・七	五・九	四・一
新城	一、五〇〇	四・三	〇・七	一・四	五・八
高藏寺	一、三〇〇	二・四	一・〇	五・八	—
小阪井	一、二〇〇	一・一	過小	八・六	三・九
清洲	九〇〇	一・六	一・八	四・〇	六・六

(因に昭和五年に於ける各都市の人口は、津五萬六千、清水五萬六千、一宮四萬三千、瀬戸五萬七千である。資料は總て當該各都市市勢要覽による)

愛知縣小都市内容職業別比率表

市町村	戸數	農	工	商	中心部落
津	三	三・四	一・四	一・四	一・八
大正九	三	三・四	一・四	一・四	一・八
十	三・一	三・〇	〇・七	一・六	〇・八
十一	三・四	三・一	〇・六	—	〇・八
十二	三・五	三・〇	〇・六	—	〇・八
十三	三・四	二・九	〇・六	—	〇・八
西尾	三、七〇〇	三・四	一・二	三・八	六・六
安城	三、六〇〇	二・三	〇・四	七・〇	五・六
半田	三、五〇〇	四・五	〇・八	一・五	八・九
足助	三、二〇〇	五・八	二・一	一・四	二・二
母	三、七〇〇	四・一	〇・五	五・四	四・一

八 自然環境との相関

都市人口増加率の分布を地図上で學びつつ、當初から自分は結局、これが一方人文的事實に影響されながら更に別に自然環境からも支配されてゐはしないかと思つた。否、或はむしろ複合的に自然環境が人文事象を刺戟し、人文事象を通じて人口増加率を支配する。——さうした形式になつてゐるのではないかと疑つてみた。

自然環境を三つの選び各々の角度から見ても見る。

工業資源

日本に於ける工業資源が石炭として北九州西北海道より水力電氣として中部日本の裏より産出されるとせば、北海道九州以外に於てはこれは又何と、丁度人口増加率的低位置に資源の多いことであらう。

然し、それも人口増加率の高位置たる中部日本に外接し包んでゐることに氣

がつけばやはり重大な相関はある。

即ち當然、これ等資源が工業地帯を刺戟し人口を吸収せしめてゐると云ふ形になつてゐる。

雨量及び日照時との關係

労働條件とも云ふべき雨量及び日照時とはいかなる關係を有つか。前者を普通地理附圖により見るに、二〇〇糎以下の地帯は明らかに人口増加率及び工業中樞地帯に合致する。又、日照時地帯の中最長時間帯も同じく同上地帯と——みごとと合致する（愛知縣測候所作製のもの及び三省堂日本地圖による）。

これ等の中特に日照時間長きことは工業労働には問題なく好條件でなければならぬ。（商業は餘りこの長さの差異の影響を受けまい。少くも現代に於ては小賣商業は益々夜間的になる）。

自分は前述の如く工業が工業資源の上に直ちに發達せず、これに隣接して起つたのは、交通その他の關係はあるにしても、少くもこの労働條件が左右した

ものと思ふ。或はこれ等の工業労働に對する條件が、表中部日本地方に長き工業労働の訓練を興へ、その能力が「工業時代」に際し近接地方に資源を得て活動を大きく開始したのかも知れない。

いづれにせよ、この雨量及び日照時の條件が工業を刺戟し、それを通して人口増加率を支配してゐることは確かである。

九 結 語

結局かくして得たる結果は甚だ常識以外に出でなかつた。

他日尙多くの材料により係數を確かめるか、或は他の支配力を探し出すかしなければ完全でないこと勿論である。曰く、「都市人口増加率を支配するものは何であるか。

一、第一次に工業である。この關係は頗る近い。

二、第二次に商業であるが、これは工業人口に刺戟され、再歸的に増加率を

刺戟するだけであり、その強度も到底工業に及ばない。

三、遡つて工業を支持するものは日照時、雨量、工業資源等である。従つてこれも間接に人口増加率を支配するものと云へる。

四、人口の大きさは、それが工業含有量の大きさを示す限りに於て、同じく人口増加率を刺戟する。但し、自然増加、商業等の項の爲にその感度は割りに鈍い。

これは昭和六年頃の「都市問題」所載である。いさゝかの興味を存するままに再録したわけであるが、内容等に他章のものと多少重複乃至差異ある點、年代の故と許容ありたい。

郷土都市を造る

「郷土都市」と云ふものを造りたいのは自分の念願である。

尤もその理論は容易にまとまることでないと思ふ。ここでは、既に現實に郷土都市として花咲いてゐる外國の二三の都市に就いて、(日本の都市については又他日詳細に紹介しよう)スケッチを記し、何等かの暗示に資したいと思ふのである。

世界の大都といふものを、仔細に見るなら、郷土都市でないと誰が云へよう。

ある都市の巡査はヘルメットを冠り(ある都市では小さい意氣な)マントを着、ある都市では大きなバッヂを胸に輝かしてゐる。それだけでも、もう三つは明

らかに三つではないか。然し、その味は飽くまで大味である。茫漠としてゐる。まかり間違へばいつか一つになつてしまひさうな三つである。建築に道路に風俗に地下鐵道にその危さが見えないと誰が云へよう。自分はやはり先輩達のよく云ふ通り、都市の味は小都市にあると云ふ語を、信じない譯にはゆかない。その味こそ郷土である。自分の嘗ての旅日記の中は、大都市の思ひ出よりも遙かに、ベルン、ルセルン(スwis)、ベルゲン、クリスチアニア(ノルウェー)、ベニス(イタリー)、トレド(スペイン)、エヂムバラ(英)、ワイマル(獨)、コンコード(アメリカ)、北京、上海(支那)等の都市の思ひ出となる材料に占められてゐるのも當然である。以下これ等の都市の構造を、ただ素描的な筆致で描いて見たいと思ふ。そして郷土都市の設計が如何にして仕上げをなされるか、それを學びたいと思ふ。

ベニス 一五〇の運河。三七八橋。寸分疑ひなき水の都である。

ベニスに泊れば車の音を聞かない。(それは巴里の宿で幾夜か轉々懊惱せしめ

たもの) 總ての交通機關をゴンドラ(小舟)にきめてしまひ、總ての橋はただその橋下を出来るだけくぐり易いやうにしてしまつた。従つてアーチのソリがあまりに急になるおそれがあるので、總ての橋に階段がつけられてゐる。だから車は徹底的に存在し得ないのだ。

町の諸所に小さな廣場がある。廣場の中央に大理石の井戸がある。その横壁には華美極まるビザンチン彫刻がほどこされてゐる。

ベニス全體の廣場はサンマルコ廣場である。ここには殆どベニス全體の建築の花を集めたやうに、ドーヂ宮、サニアルコ寺、鐘樓等が鬱然と集められ美しく配置されてゐる。周圍の店は全部アーケードである。

赤い四角な鐘樓からは朝な夕な殆ど町の生活の伴奏の様に鐘が鳴らされる。

サンマルコ廣場の前の水面は、サンマルコ運河である。ドーヂ宮、サンマリヤ寺、マジョレ寺に圍まれて、これも亦、比ひ稀な水廣場を形造つてゐる。

トレド タホ河に圍まれた徑四〇〇米の花崗岩の丘。その上に堆く積まれてゐるのはバルコニーの多いサラセン風の家屋群である。城門のアーチの型からまづ我々は夢路に誘はれる。

路と云ふ路は廣狹定まりなく、紆餘曲折自在である。ふと廣場に出ればそこは夥しい日光の饗宴で、野天カフェーにはレモナードが花火の様に抜かれてゐる。町の中央に本寺があつて、これは純歐風であるだけやや趣きがない。

トレドはとまれ、完全に、地から咲いた花である。

バルセロナ 汽車の中で、同乗の若者が、マドリッドはスペインでない、スペインはバルセロナだと言つた。夜十二時着。直ぐ町へ出て、レモナードを造つて貰つた。黄色い、月の色の様な奴を搾つて出してくれた。その味は今に至るも忘れない。(スペインに入つた最初の夜の泊りはイルンといふ都市である。終夜煙火とギタで大騒ぎしてゐる町であつた)。

例の張り出し窓で、眞闇になつた道路が四辻を成してゐるところに、昔ながらの龍吐水の様な噴泉があつて、附近の女連が水壺をもつて水を汲みに來てゐ

る。狭い盛り場にはガラス張りの提灯―それこそアラビア夜話で出さうな―が三つ四つ五つ、沖空に吊つてある。海岸に出れば緑樹かぐはしい遊歩道になつてゐるが、そのつき當りは丘になつて、その上に小さな赤い旗が建つてゐる。要塞の見張りなさうな。

さうだ、ここそはモーランの「夜開く」の第二夜なのである。

ベルン アルプスから出た水晶の流れは大谿谷を造りながら、ここで大うねりに一つうねる。ベルンはそのうねりのUの字の中に、苦もなく包まれてゐる小熊の舌の様な形の可愛い町である。(ベルンと云ふのは熊と云ふ意味ださうな。今でこそスキス聯邦の首府と云つたところで、弱小國のひげ目は何としても否み得ないものの、その昔は今のベルンがはるかに卑下して、我は北方の小ベルン即ちベルリンなりと名乗つて、敬意を拂つてゐたのでも窺はれよう。)驛を出た路は十字形にベルン臺地の舌を切る。縦の一本は眞直に下つて、町を縦断し、河を渡る。町の兩側の家は悉くアーケードと稱するもので、初めか

ら歩道は家の中を貫通してゐると思へば差支ない。

親しみ深い通りである。アーケードも四辻へ來れば切れる。そこに例の――例のでは解らないかも知れないが、眞四角な水車小屋の様な時計臺。文字盤には碧瑠璃の地に奇想天外な人の顔などが模様化されてゐる。そしてその屋根は又思ひ切つて急に細くなり、長々と空中に聳えてゐるこのあたり特有の時計塔――が、燦然と立ちはだかつてゐる。そして又アーケードになる。河を渡れば郊外になる。その袂に恰度地上から覗けるやうに掘りさげた圓い開け放つた熊の檻――と云ふより遊び場がある。これは町の名の表象で町のペットなのであらう。これによつて市民がどれだけ町への親しみを増すであらう。再び戻つて十の字の横の一方の路を行けば、左に行くも右へ行くも直ちに河へ出る。

右へ行く。眼もさめるやうなと云ふが、これにまさる瞠目の風景は無いだらう。半月形大アーチの下は、百尺にも餘る高さを隔てて、ガラスの板の様に流れてゐるのか湛へてゐるのか解らない様な流れである。清冽さは底の小石さへ

數へられる。美しい断崖の上には（恰度今來た町の方に）スキス特有の紅、紫、黄、青とりどりの色彩を大膽にほどこした聯邦議會が碧落の中に抜き出てゐる。橋を渡つて暫く行けばグルテンの丘に出る。これはケーブルカアによらなければならぬ。スキ一の一隊に加はつて昇れば、丘の上は一面に雪の斜面である。はるか雲煙の彼方にアルペンの主峰が夕映えてゐる。それを眺めて黒いマントに包まれた若い男女がさつきから動かうともしない。

ここに來て初めてスキスは静けさ極まる。こなたを望めば、——これはどこかと思つたら、今上つて來たベルンの町だ。夕靄の中に塔も河も紫に煙らうとしてゐる。

ここに來て我々はベルンの町の系統が、十字に加るに二つの重要な直交道路を有つてゐる事を見出す。一つは十字の上部、驛との間の一線で、南端に（河岸）聯邦政廳を有ち、北端にベルン孤兒院を有つてゐる。十字の下部、熊の家との間の一線は、南部はムンステル大教會の堂屋に對し、北部は古雅拘すべき

階段を有つた市役所がある。

さうだ、今來た道と反對の向ふ岸を見れば、十字軸の、南北線の一端コルンハウス橋の袂には美しい劇場が見えるではないか。鐵道に沿うては美術館。植物園、大學。正にこれこそ、中歐の珠玉でなければならぬ。

（ベルンの郷土情調の一つは町の所々に置いてある噴水盤の魔神の像であらう。金銀極彩色であり、而も甚だ小型である。情調のもう一つは、市の小學生の帽子である。それは學年毎に大黒帽の色全部を、黄なり赤なり空色なりに變へる。雪と空と山と水の國の人達は、情藻自體が根柢から清らかなのかも知れない）。

ルセルン　ルセルンに入る人は、まづ針の様に尖つた教會の塔を見る。又雅致そのものである水塔を伴つた屋根のある畫橋を見る。

驛を出れば、右手には透明とか透徹とかそんな語を遙かに超さねばならぬ平明なルセルン湖が開いてゐる。——それは開いてゐると云へようか。湖面はつ

いそこでアルペン系の雪の連山に囲まれ、水晶の様な水面は殆どその倒影で一杯であるのだ。それは倒影で出来た函である。

エチムバラ 旅行案内には『歐洲第一の名路にして』とほめてある。南驛を出て、プリンス街に出る。先づ眼をうつものは路側に矗々たる青銅の厨子に納まつたスコットの大理石像である。

つき當りはカルトン丘、ギリシヤ式の柱列が美しい。さうだ氣がつかなくつた、街路の右側は直ちに非常な谿谷で、——それは眞青な眞青な芝生をしきつめた谿谷で、公園になつてゐる。谷の底には詩人によつて不斷の希望を唄はれた大噴水が、蕭蕭と水を噴いてゐる。

その谷の向ふの中空に、折から北國名物の朝霧の中に如何にも傳説めかしく浮いてゐるのがエチムバラ城ではないか。

その城に屬する舊市街と、プリンス街に屬する新市街地を結ぶのが、谷の真中を貫いてゐる大道路で、その真中に美術館が品よくをさまつてゐる。そして

北端の驛にしても、その脇の市場にしても、いづれも路面下になつてゐる。

この町の郊外に、圓卓武士の傳説で有名なアーサー王の座があり、詩人ロバートハイズ、スチブソンソンの、スワンストンカテーチがある。

ワイマル ワイマルを郷土化し切つてゐるのは市の東、谿流を狭んだ林間公園である。

林間と云ふ名に相應しく細い高い枝々と、朗らかな鳥の囀りと、日光にスカされた公園である。ゲートもシラーも、瞑想に耽りながら歩いたでもあらう美しい自然である。

それに沿うてゲート博物館、王宮、ゲート莊が點々と配置されてゐる。

公園は更に舊市内の北部を巡り、陸橋下をよぎつて、西公園につながり、西公園は又南下して國立劇場——その前にはゲート、シルラーが手を握り合つて立つてゐる——に到つてゐる。

呀、人口四萬の都市にこの藝が出来あるであらうか。

ハムブルグ 漢堡は固より大都市中の大都市である。郷土の匂いと云つたら、塵一本もない超現代の大都市である。その大都市が他の巴里ロンドンと違って、云ひ様のない深さ、影を有つてゐると云はれるのは、内外二つのアルスター湖を有つてゐるからだ。しかもその二つが、遙かにセイヌ、テムズと段違ひの價値を稱へられてゐるのは、恐らく前二者が、いつの間にか美と實用とを兼ね出し、臆てどうやら實用一點に傾きかけてゐるのに對し、これは飽くまで、エルベは臺所に、しかしアルスタアは茶の間にと、美、風致の一點に保たれて來たからであらう。しかもなほそれが、ジウネーブあたりのそれにさへ勝れりとされねばならぬのは、そこが周縁悉く誰でもが通れる路になつてゐることと、湖面を陸上の電車と全く同じ料金の均一汽船が、氣さくに客を運んでゐるからだ。

夏の夕、涼風に送られて水面に浮べば、夥しいボート。そのどれもに美しい男女が嬉々と戯れてゐる。中には、年老いた母を乗せて行くらしい少年さへも

ある。

船は楽しく進む。とある木蔭を廻れば、これはまるで伽嘶のビーチをまくる中、不意に美しい繪にぶつかつたやうに、紅と白の日傘の中に、海水着の一群が、静かにオーケストラに耳を傾けてゐる。レモナードが、急がしく運ばれてゐる。

コンコード 卑しい低劣な「アメリカ都市」の中にも、こんな純乎凜冽とした——例へばリンゴの皮のむきたての様な一面がある。

コンコードはさうした小さな町の一つである。ポストンから一時間。停車場にはホームもない。いきなり踏み段から車掌の置いてくれた踏み臺に乗つて降りなければならぬ程度である。

郷土情調の焦點は廣場にあらう。

千坪もあらうか。真中は芝生で何かの記念碑が置いてある。突き當りがまこと鄙びな宿屋で、初めからもうホテルとはせず、インと斷つてある。その右

側が發電所の様な赤煉瓦の市役所。

東に向つて街道が走つてゐる。廣場と云はず、街道と云はず、亭々たる樹木で圍まれてゐる。エマーソンもホウソンも、瞑想しつつ散歩したであらう並木である。

廣場から街道に遷る右側に教會がある。白聖館に金の十字はまこと純潔そのものである。教會と云ひ、ホウソンの家と云ひ、エマーソンのそれと云ひ、悉くこの地方特有の木造の雅致ある建物だ。

廣場の向ふのインの側の道を傳つて下れば、そこにはホウソンが有名な詩をあまた草した庵が昔を偲ぶよすがとして残つてゐる。

市役所の背へ廻る道の角は『眠り丘』と標示されてゐる。そこはこれ等の詩人哲人が安らかに生涯を終つた林間墓地のあるところだ。

シャトル シャトルの町の真中の廣場の隅に、急がしい雑沓に埋まつて、眞青に塗られたアメリカインデアン胸像がある。臺石にシャトル會長とある。

會長シャトルが、果してこの町をアメリカ人に渡す爲に功勞があつたものか。或はアメリカ人と戦つた愛國の士として讃へられてゐるのか。それはどちらか解らない。

何にしてもこの急がしいヤンキイ文化の大潮流の底に、悲壯な眼をした會長シャトルの胸像は明らかに郷土史である。

コペンハーゲン デムマークはお伽噺のアンダーセンを産んでゐる。シェークスピアはハムレットをここの王子にしてゐる。

首都コペンハーゲンを歩きながら眼から離れないのは、國王の城と、それから本寺と、それから——アレはどこのか知れない。いづれにしても螺旋形の巻きあげたやうな、しかもどこか剽輕にまる味のある大塔である。

ベルゲン 静かな波紋を造りながら船は峽灣に入つてゆく。ベルゲンの町は丘の斜面に咲く百合の様だ。點點々と白、赤、青、黄、とりどりの家が丘に沿うて、層々と建つてゐる（木造ペンキ塗り）。

町に入つてからブランデン丘に登る。俯瞰すれば靴下の様な小さな町が、夕霧の底に水銀の様な水の上に、長々と横たはつてゐる。王立劇場。銀行。取引所。町の鼻の公園。北海の女王は脚の小さな金の帽子を冠つた女王だ。云ふまでもなく、この郷土情調を育くんでゐるのはペーパーナイフの様な峽灣である。

クリスチアニア 大學と国立劇場に挟まれた帶狀公園。はるか上手には白い王宮が光つてをり、下手には頑固な停車場が盤踞してゐる。

ここを中心として劇場、美術館、カフェーが並んでゐる。赤い大黒帽の、赤いネクタイの、ステッキに赤いふさをつけた大學生が、右往左往してゐる。

国立劇場の前には、イブセンとビエルンソンの像が屹立してゐる。

峽灣を超えて向ひ側はビグドウ別荘地である。白い棧橋が一抹の水平線の様に水上に突出てゐる。その突端が水浴場なのださうだ。白い帆を張つたヨットが水上を行つたり來たりしてゐる。

ここでは峽灣も都市面積の中に入れなければならない。

北 東 北京は懐かしい町ではない。潤ひのある町でもない。(北支の都市は皆埃つぽい。どこか殺伐である)ただ郷土的であると云ふ點で、これ程郷土的な町は少からう。

至る所に、街の端景をなしてゐる牌樓、鐘樓、鼓樓、城門。特に城門の殆ど人間以上の感じしか與へない壯大さ。城壁、その城壁も生やさしい大きさではない。高さ五十尺、上幅四十尺。城壁の周圍に配するに天壇、先農壇、日・月・地壇、いづれも大理石造りの特有華麗なものである。

更にこの郷土化のとどめを、市民七十萬悉く、純支那風俗のままを以てしてゐる。

かくの如き、國土そのものなる首都、いづれの國にこれありやを問はう。

上 海 上海は大都市である。世界都である。郷土都市等と云ふべくもない。にも不拘、——どことなく、上海でなければならぬものを有つてゐる。

美しい詩を有つてゐる。

それはどこから来るか。河畔公園に遠慮會釋もなく並べられたジャンクの茶褐の帆故か。やはりそれは、依然として支那そのままの風俗と、その淵源地である上海舊城の爲ではないのだらうか。狭い幅一間そこそこの鋪石道と、それに沿うた金銀細工、マーシジャン製造象牙細工のきらびやかな店。彩雲の様にありかさなつた立看板。その間を悠々と行く人。その渦の真中に池があつて湖心亭がある。(そこで紳士が立小便をしてゐた)その上海舊城の爲ではないか。

罪惡の花咲き匂ふ太馬路。そこには鳥籠のやうな茶館があつて、小鳥のやうに妓達が唄つてゐるかと思へば、赤いターバンを巻いた魁偉な印度人が濶歩してゐる。乞食が、車道を歩いてゐるかと思へば、歩道に寝てゐる良家の太々もある。

上海はアラビアンナイトの中のどこかに無かつた筈はない。

自分はここに當然、田園都市に就いて讚稱するのを忘れたやうに見える。然しこれは明らかに作意を以てのことである。

申し合せたやうに一つの丘陵のない、一つの清流のない都市。いかにも作つた都市である感じの街路風景。傳統の皆無。人造の都市に匂ひを求めるのは、造花に馥郁さを要求するやうなものだ。

郷土都市の價値は『田園都市』——それは、さもその讚稱を受けるべきかの様
様に思はれてゐる。——でさへも及び難いところに深さを有つてゐる。

都市の味

一 都市と自然

夫婦の顔はどこか似てゐる。殊に思はれ人同志の場合にさうである。これは似てゐるのではない、似て來るのだ。

或人はこれをかう説明してゐる。人間は元來何かを模倣しないではゐられない動物だ。自分の愛するものを完全に所有したい意志は總てその舉措模倣となり、結局それが昇華して夫婦は似て來なければならぬ原則になるのだ——と。

そしてこれは又人間が無意識にやつてゐる生命の物理学でもある。北風の強い時、北に向つて帆をあげる船は氣違か、餘程の馬鹿であらう。同じ家庭の中

で、男女二つの生命が濤搖しようとする時、その二つが各違つた方向を有つたとしたら、力の弱い方が枯死するか、互に衝撃して果てるか、いづれにせよ悲劇に終るにきまつてゐる。その相は不健全で醜い。

大きな自然のふところの中に——そのひと隅の、谷間とか、盆地とか河岸とか、海際とかに七寶の象箴の様に燦として都市が散點してゐる。人間はこの都市を砲臺として自然を征服するのだと云ふ。

都市の中へ入つて見る。ラジオはヒリップピンのヂャズを傳へ、映畫はモスクウの博覽會開會式を舉行する。倉庫の中にアフリカの香料が山積されてゐるかと思へば、冷蔵庫には北海の鮭と、臺灣のバナナが棚を同じうし、飛行機は半月にして巴里からの旅人を運ばうとしてゐる。緯度と經度を超え山と河と距離を無視し、近代文明は都市を根據地として世界を全く單色化しようとする。大阪を第二の東京とし（都市内部へ入るが好い、大阪と東京とどれだけ差があるか。ただ大きな東京と小さな東京の違ひにしかすぎない。）名古屋を大阪のブラ

ンチに、豊橋、岡崎は小名古屋と云ふ風に脈絡一系、文化の大量生産の網に一目の亂れも見えない。

人間はもう自然を問題にしない風に見える。氣の好い人間の中には、都市と都市の間に侏儒のやうな「自然」がゐて、ただ人間の頭使を待つてゐる位の自然觀しかもつてゐない。然し、一度高い山に登つて靜かに下界を俯瞰して見るが好い。おもちゃのやうなキラキラする可愛い都市、都市と都市を結ぶ針金の様な鐵道、それだけだ。それが悠々と天地の間に起伏してゐる山脈と、茫々たる平野の中の何だ。

自然と云ふ大生命。氣象と地質と傳統と位置と時間で、地球上一點として等しき相を有たぬ多様な大生命の中に、眇たるおもちゃのやうな都市だけがござかしくもどこも同じ内容形式のものであり得ると考へる。——それは數學ならば三角も代數も同じ算法でやれると考へる無識と同じである。

それは直に二つの生命の相剋になる。しかも必ずや人間に負の卦がある。都市が近來あらゆる意味で住み心地悪くなつたのは、この邊にも深い消息があるのである。

都市計畫が法律通り、今日一日の衛生、保安、經濟につつがなからしめるだけのことなら、樂なものだ。然し、もし良心のささやきを幾分なりとも耳にはさんで、人類の住み家として、永久なものたらしめようと考へ出したら、かなり厄介なことだが、この二つの生命の調和——自然と人間の——否むしろ、いづれかをいづれかに適應させるいはゆる本格の都市計畫に手を染めなければならぬ。(しかしてこれも亦人間を自然に適應させるのが順であることは云ふまでもない)。ここに都市の諸相が出、味が出る。

昔の旅は樂しかつたさうな。難波と江戸と仙臺は、全く違つた自然にかもされた三つの夢であつた。美しくもあつたらう、又驚異でもあつたらう、心地よくもあつたに違ひない。都市は自然と人生との融合の極みであつたのだ。旅とはその驚異の味到の謂であつた。

今の旅は商用でない限りマゴマゴするとアクビになる。先にも云つた通り、大阪は第二の東京であり名古屋は小大阪にすぎないのだから。別府みやげと江ノ島みやげと松島みやげは同じ東京の間屋から來てゐるのだからたまらない。せめて世界をまはつたら何とかならうと思つた。

自分の大正十二年十一月から十三年九月にかけての旅はかうした都市相——都市の味——を味はふ旅であつた。都市の中に泌み出てゐる自然の容を（生でなく融合しきつた都市相として）探したい願ひであつた。——美しい（裝飾されたと云ふ意味でなく）都市はあらゆることに適へる善い都市であると云ふ信念の下に。

その時の貧しいノートをもととして次の章を爲して見た。

二 地方色から

都市の味は前にも云ふ通り澎湃として脈を打つてゐる自然からも滲み出なけ

ればならない。然し自然は現實の横の擴がりをもつてゐると同時に、刻一刻うつりゆく縦の伸び、即ち時の相を持つてゐる。その爲にも都市は又独自の味を有つ。前者を地方色とするなら、後者は時代相である。

更に文化に對する分擔、即ち商業都市であるか、工業都市であるか、學園都市であるかによつても相を示し、更に面白いのは大都市と小都市とが單なる量の違ひでなく、油と水程の質の差を有つてゐることだ。これ等も又都市の味の原因でなければならぬ。ともかくも順序としてその中、地方色から來る味を考へて見よう。

地圖を擴げて見る。

東洋の都市は支那から流れて、印度アラビアの人達は殆ど海綿の様な、いはゆる迷路型の塊狀都市を形成してゐる。東洋人の生活趣味の中には、かうしたくせがあるのだ。アラビア人の征服したスペイン南部、蒙古人の行つたアジアロシアに、これの多いのもうなづける。ただ支那本部の嘗て帝都だつたところ

だけは、整然たる方形碁盤割で、それはその文明の入つたころ一所に流れて日本にも飛鳥、奈良、京都に入つてゐる。然しこれも結局支那人の事大趣味の産物でなければならぬ。

英國の都市はジョムブルの性格の如く、一本一本の勝手な道路が自由自ままにゆがみつつ、いつの間にか何とかか一つの系統を成してゐると云ふ型である。米國の都市は下手な圖工の製圖の練習の様に、無味乾燥な碁盤割である。佛國にはベルサイユ宮殿の設計に端を發した美的放射線がいたる所の都市の中に星座の様に輝いてゐる。獨逸都市のライン河に沿うたものは又殆ど必ず河を半徑とした半圓の城砦があり（その内部は海綿狀に似て實は整然として美的市街組成になつてゐることが解つた）、その城砦を中樞部分とし、殆ど畫案に近い放射線を發散してゐる。露西亞ほど、多種多様の形式が殆ど全く消化されないうで用ひられてゐるところは外にあるまい。ヨーロッパロシアは、獨逸文化移入の影響をうけたせゐるか、ペテルブルグ、モスコウ、ニジニノブゴロド等クレ

ムリン（宮殿）中心の放射形が多いが、アジアロシア方面の植民都市になつて來ると、碁盤型やら極端な曲線型や、種々雑多そのままにころけてゐる。

かうして自然は結局各所屬の民族の性情を通じて都市の型の中に自分を語つてゐる。然し都市の味と云ふからには、中へ入つて見てからでなければ本當のことは解らない。

米國の都市に入つて見よう。米國の都市から受ける感じは、不可抗的な壓迫と無趣味。せめて、美しさを求めれば、建築と公園に金をかけたところから出る文化の野蠻人と云ふ感じである。すべては機械化されてゐる。市民の殆ど全部はアパートメントの間借人である。庭もなければ門もない、ただ寢床だけの間借である。食事にはオートマツトから始つてあらゆる便利な食堂が備つてゐる。細君の代りにはよく囁きよく踊るタイピスト達が、至極經濟的に満足を與へてくれる。衣服はレディメイド屋が二三分でしつくりとからだに合ふ様にして賣つてくれる。劇場は朝から開いてゐる。談笑にはクラブがある。庭は町の中

共に集めて大公園にしてある。我々が一家庭に備へてゐるものを完全に分化して生活の大量生産をやつてゐるのだ。

人間機械化にはこれが最後の手段だ。その気分が随所に出てゐる。

即ち機械としての横溢たる活気はあるが、人間としての我々を慰すべき何物かがない。道を歩けば道は馬鹿の様に真直だし、家と云へば愛嬌もない窓の化物の様なのが見上げる様に聳えてゐる。往來は自動車狂走だ。沸騰する様な混雑だ。街路の女王とも云ふべき公共建築は、九谷焼の様に金ピカで、様式はただギリシヤ、ローマのコッピイ一點張りである（アメリカ人は明かにギリシヤ人だ）。仰々しいばかりで甘味と云ふものは微塵もない。路上彫刻は汎米主義宣傳のワシントンとリンカーンづくめである。劇場に入ればもうダラシのない赤裸踊りか、くすぐり喜劇か單純な安直な戀愛奇譚ばかりだ。夜のタイムス廣場へ出てイルミネーションを見るがいい、ただ濛とした紅白紫青の明滅の外何の能もない。市民の一人を擱へて何か見物するものはないかと聞けば、某々ホテ

ルを見なさい、これは高さ何米面積幾エーカー部屋の數何百で使用人何千と來る。次に何公園に行け、その面積何千エーカー、その中の植物園の植木何萬本と來る。思想から形式から、これは文化の大工場にすぎない。

そこに又我々の理解を許さぬ「明日の美」「明日の善」の萌芽があると或人はほめる。それはほめ言の美術品でないかと疑ふ。

米國と好いコントラストを作る英佛に入つて見よう。ここで感じるのは何よりもまづ街の隨所に素裸で首を出してゐる柔かい歴史である。そしてそれから來る味の丸さ溢さである。ここにはニューヨークの様な人を壓迫する感覺は全く影をひそめて、又その代り活氣の方はまるで缺けてゐるかも知れない。

殊に英國都市は蒼然としてゐる。沙翁を産んだストラットフォードでは、今だに沙翁時代の木と煉瓦を組み合せた古雅掬すべき様式の家を建てる——或は町でさう決めてゐるのかも知れぬ。エデムバラ一流の通ブリンズ街は、傳説の多い古城エジムバラ城を朝霧の谷ごしに仰ぎ（谷を片側とする片側町で歐洲隨

一の美しい通とされてゐる。町の片側には郷土詩人スコットの大理石が静かに行人を俯瞰してゐる。ロンドン子は一六六六年の格好な大火の跡を、有名なレン案によつて更生されることを肯んじないで、灰燼の上に、舊によつて舊の如く曲りくねつたオックスフォード街、ストランド街と大入場の關取の様なセントボールのロンドンを描いてしまつた。

そこにある建築もあらゆる時代を代表して様々である。オックスフォード街には、今にも玉山倒れんとするエリザベスハウスがあり、ストランドには中世の僧の風貌ある王立法院がある。テームス河下に今なほ赤装の衛士のゐるロンドン塔があるかと思へば、河上には轟々たる議事堂及びウエストミンスタア本寺が古建築の昔を語つてゐる。

それに又ロンドンが巴里、紐育に對し對比するのは、路上電車を殆ど有つてゐない爲、例の耳を蓋ふやうな車輪と鐵軌との相打つかしましい騒音が無いことである。バスは鏡の様な路面を靜かに走り、高速度鐵道は地下何十尺をコト

リともせず動いてゐる。

靜かな町である。人もさう云ふ如く、ロンドンと云ふ村である。發達し切つた村である。

ロンドンを村とすれば巴里は町であらう。家並もそろつてゐれば高さも殆ど堂々たる五階六階でそろつてゐる。街路は定規の様に眞直だし、その配置も幅員も殆ど近代都市の模範とされる程、整然としてゐる。

即ちシャンゼリゼーとルーブルを結んだ東西軸、これに地球の軌道の様な美しい二重の楕圓の廣路。これ等美觀道路の交叉點は必ず美しい廣場になつてゐて、又その中央には必ず革命に因ある記念像が置いてある。公園があれば像があり、公館があれば必ず廣い前庭がある。都市全體として頗る整然としてゐる。誠に端正の美である。

ただ巴里の不可思議は、あれ程整然とした街が、よしニューヨークの乾燥さとまで行かずとも、どことなくふくらみがない、丸みが足りない、親しみがな

いことだ。第一、街路風景の最大要素たる屋根の錯綜美スカイラインの貧しいこと。まるで工場裏だ。更に公園とかトロガデロあたりを別として、廣場の風致のつまらないこと。十三本の大街を一基の凱旋門で結ぶことに何の味があらう。街の見通しは——この美術園にして——肩寒げな直線一點張りで（なぜか曲つた並木廣路が直線の感じである。恐らくスカイラインの單純さに基因してゐるのだらう）ある、それに又建築面の平面さ。

ただその所々にパンテオンやノートルダムや、アーチ、オペラがあつたりするが、それにしてもそれは月並を出切れない。巴里はあくまで町である。長屋趣味の取すました月並な硬い都市でしかない。

さて、これ等は地球の中部の（少くも文化帯の）しかも完全な平原都市達である。地方色としては平凡しか豫期出来ないところである。

それにしてもこれだけの味の違ひがあるのだ、これを山歐とか北歐南歐に眼を移して見る時、實にその特異さは人間の對自然挑戦に對するよい皮肉になつ

てゐる。

山の歐羅巴、スウイスの都市の味は一言にして小さくて美しい。筆者のその

時の歌に

スウイスはお伽噺の紫の水晶の國月の小さき。——とあつた。

大抵の都市は湖に臨み、そして必ず又巖々としたアルプスの連峰を背負つてゐる。汽車がこれ等の町へ入れば、必ず先づ針の様に美しく尖つた教會の塔に迎へられ、街へ入ればその町の目ぬきの四角にある、文字盤を丹青心ゆくまま塗つたお伽噺の舞臺装置の様な時計臺に眼を驚かされる。工場の少いせゐか建築物の壁面は處女の様な本來の美に輝き、辻々にある珍らしい彫刻は、丹青金銀の極彩色をほどこして山國の人達の特別な色彩感覺をしのばせる。

これ等の卓拔極まる細工は（都市工藝とでも云ひたい）學校生徒の制帽を、白、青、赤、黄と燃える様な色別でやつた面白い性格の國民にして、初めてやれることなのだらう。

ヘルン、ルセルン、シロン、ジュネーブ、それ等は雪解の陽を仰ぐ様な明な
思ひ出である。

哲學と音樂の國獨逸に入れば都市は著しく瞑想的になつて来る。都市をめぐ
るのは千古未踏の森林である。それ等は材木を採る爲でも何でもなく、ただ散
策好きなこの國民に永久の散策を恵む爲に興へられた市有或は寺領林だ。

都市内部の公園も佛、伊の様な花段噴水式であるよりむしろ著しく森林性を
帯びてゐる。市街の建築物はゴシックから入つた縦線に富んだ安山岩荒けづり
の灰色の物が多い。それは地下鐵道の入口の柱にまで使はれてゐる。殊に我々
はあの柔軟性に富んだ屋根の勾配曲線を何とも云へず味はふ。そしてこれ等が
どれ程都市に瞑想味を與へてゐる事か。

街を歩けば至る所に路上彫刻のあることは他の國々に等しく、そして又それ
等が多く單純な英雄崇拜か軍國主義宣傳の具にすぎないことの多いのも同じで
ある。ただここではこれ等とやらんで母の悲しみ、蛙、お伽斬、山よりの子笛、

ショーペンハウエル、ハイネ等と云ふ純粹藝術のもの、或は文人の像が少から
ず行人の心をうるほしてくれる。ここに獨逸人の大きな半面がある。

更に橋を見れば、それは天を摩する様なタイドアーチである。そこには隆々
たる縦線の鐵材が繰り返されてゐる。又獨逸中世都市の廣場と建物の調和、屋
根の美しさ、曲線道路の美しさについては、既に英國田園都市創始者連にどれ
程參考になつたことか解らない。

獨逸を抜けて、北スカンデナヴィア三國に入れば、都市はいよいよ特色づけら
れる。

ノルエーの都市は、大抵斷崖と斷崖の間にはさまつて、帯の様な深碧を湛へ
た峽灣に臨んでゐる。山又山のこの國に取つて峽灣は唯一の交通道路だから、
都市はその成立の條件としてこれに副つたわけである。後に山を負ひ、深碧に
臨む家々、殊に木造の家が多いのでそれ等は、赤とか青とかとりどりの色
に塗られてゐる。木造の家は粗だけれども、やさしいものだ。かうした家々が

山の上に點々と花の様に點じられてゐる都市、殊にその前にはこれ等全部を倒影し、かげもくづさぬ清澄極まりない水面を有つ都市は晴明そのものである。

この國の彫像の特色は同じく獨逸の系統を引いてはゐるが、著しく文人とか藝術家が主題になつてゐることだ。公園の小高い丘の上には自然石の臺石の上に、今家からブラッとして出て来て一寸立寄つたと云つた風な樂な形を採つた銅像が、同じく自然石に倚りかかつて街を見おろしてゐる。小さな廣場には花壇でも逍遙する氣のグリークの像がある。王立劇場の前には、黙々として想にふけるイブセンとビエルンソンが立つてゐる。いづれにせよその臺石が實に簡素で背の低いのが親しく、彫像のポーズの樂で自由なものもよろこばしい。

然しスカンデナヴィア三國も、スエーデン、デムマークに入ると餘程特色が減り、スウイスと巴里、獨逸の端正なところを打つて合せた様な都市が多い。國民性と歴史がさうさせたのであらう。勿論そこにも外で見ることの出來ぬ螺旋形の異形な塔のある風景や何かは所々に見出すことが出来るが。

さて全く轉じて南歐伊太利、西班牙に入るならば、都市の味も一八〇度の回轉を示し、まづ我々は町の辻々に奔騰する噴水の多いのに胸を張る。殊に西班牙の辻々では設計の面白い古雅な涌水井戸のまはりに、人々が水瓶を肩にかかへて集つてゐる畫趣ある光景に接する。家々は皆思ひ切り街上に突き出した露臺を持ち、そこには香ばしい風が通ふ。

また何にも増して植物の多いこと。

然し伊太利はギリシヤの搖籃の中に育ち、スペインはサラセンと歴史を交へてゐる。そこに一つは南歐の山の手となり、一つはその下町となる環境が生じた。即ち二つの國の都市には品格に於て根本的喰ひ違ひがあるやうに思はれる。伊太利都市の建築物はギリシヤの傳統をついだ爲、明暗の變化錯綜は殆どその極致に達してゐるが、その代り色彩には全く乏しい。殊に今の伊太利は、ただ古ローマの廢墟の中に御大相にもうづくまつてゐるのだから、もしその中に残つてゐる歴史と傳説をのぞいたら、都市としては殆ど無價値だらう。殊にそ

の大理石が古び黒く汚れてしまつては無價値以上の様な気がする。(かと云つて
未來派宣言の様に新しきもの總て佳しとは云はないが)。そして、その間の丘と
云はず、庭と云はず、一本脚の鳥の様な、眞黒なヒョロ／＼したサイプレスが
謎の様にニョキ／＼立つてゐる。

スペインは違ふ。

サイプレスに代るのは葉の潤い熱帯樹である。街の眞中にはそのみごとな植
樹帯がある。(そしてその葉かげの大理石の椅子に、乞食が伸々と午睡をして
ゐた) 建物は隨所にサラセンだ。各市の宏大な闘牛場、大ホール。バルセロナ
の新大通には殆ど全部陶器の様な色も彩な、そして又屋根と云ひ、軒と云ひ一
つとしてとげとげしい直線のないサラセン建築の純粹なものが、抜ける様な蒼
い空に光つてゐた。寺院の窓。いづれその匂ひのないところははない(行人の
眼、顔色にもまがふ方なき東洋の影がある)。

南歐の夜が紫色の帳をかけるなら、この二つの國は又二つの違つた容になる。

自分のすごしたバルセロナ、マドリッドの夜は、葡萄酒の泡立つ様に華かな
ものだつた。ホテルの窓の下には、夜通し富籤賣りの叫び聲やら、花火をあげ
る音、ギタとマンドリンで踊る兵士達で、寝られない夜が幾夜つづいたことか。
それに引きかへナポリの夜は静かだつた。海際の浪のかすかにきこえるホテ
ルの高窓を開けて(月の好い晩であつた) 露臺に出れば、霞む様な往來に、乞
食夫婦がギタをひいて金を乞ふのが小さく見えた。

さて最後に日本と支那の町から受ける感じは、支那にはどことなくこのスペ
インの気分があり、日本にはノルエーの気分のあることだ。支那は色彩的、土
石蔵、色瓦、屋根の反、そして市人のかしませ。日本は總て單調で色彩に遊
く(これはノルエーに違ふ) すべて直線、木造、町の静けさ、山水。

以上秩序なく印象のままに述べて來た。ともかくも單純な近代人が如何に思
ひあがらうと、繊細な眼で街の隅々を見るなら、自然は如何ともしがたく隨所

ににじみ出て、美しい地方色をあらはし、旅人をよろこばしてゐる。

自分はこの地方色のある間、その都市は神に恵まれてをり、これがうすれて行くに従ひ、破滅の階段を降りつつあるものと卜ふものだ。(かと云つて駕籠を以て汽車に、千石船を以て蒸汽船に對抗せよとは云ふ筈はない。世界的に交渉すべきものは世界色でゆくべく、地方的のみものは地方色のものでやるのが自然であり、合理であるに拘らず、總てをただ一つの規格で行かうとするものに對し辯をなすだけなのだ)。

二 時代相から

「都市がもし紙で出来てゐたら好かつたのに」。

名前は忘れたが、ある大陸の衛生省大臣が、或時都市計畫家の集りに臨んでかう云つて長廣舌を結んださうな。不幸にして石造國西洋には一旦歪みなりにても都市が出来てしまつたら最後五百年六百年はそのままに、そこで子孫代々

が歪みなりの生活を忍ばねばならないやつかいさがある。それに引きかへ木造國日本は、幸と云ふか衛生大臣の理想とする紙製とまでは行かずとも、用に耐へなくなつたら改竄取り拂ひ自由に出来てゐる。(自由であつて好い筈である)。この點では大いに彼の賞讃に値するものだらう。

だが然し今ここに自分が考へようとする都市における時代相と云ふ様な低徊趣味の材料としては、遺憾ながら全く無資料である。天災地變、腐朽、改修等は、白蟻の様に絶えまなく都市をついばんで行く。ものの百年もたつて、昔のおもかけをしのぶことは、ふなべりを刻んで劍を求めるよりも難い。いきほひ、自分は今この項を作るに際し、便宜、考察の材料を西洋に探した。かなりあきたらない氣持であることは勿論である。

古い都市としてまづローマに行つて見る。

ここに來て然し我等は石造都市の歴史にも極限のあることを知らなければな

らぬ。二千年といふ年月はかなり露骨に人間の仕事を蹂躪しおぼせてゐる。現ローマは結局十九世紀都市の皿の上に古ローマの骸骨を、二十世紀伊太利人の文化住宅を無遠慮にブチまけた、異様な残肴でしかなかつた。廢墟の中の骨片を一つ一つ拾つて貧弱な幻想の幕をすかして見たところで、大闘牛場、大浴場、貴族の邸宅大フォラムの綜合から何が浮かばう。親しい歴史で愛讀した古ローマは、そんな粗い概念の篩の眼ではとらへることの出来ない程濃かだつたに違ひない。七つの丘の上に座した薔薇色の都は、遠く自分の貧しい臆惻の向ふに置くのが正しい謙遜であらう。

だがここに幸と云はうか、ローマと共に榮えしかも榮えの最中に大自然の怒にふれて（と人は云ふ）火山灰の中に埋つたボムベイがある。乞食がギタにフアスシヨの黨歌を唄ひ、メリケンがシトロローネとマカロニーを通がりに來る今の世に、あきらめた様な面をして灰の中に二千年の昔を語つてゐる。

今この都市を拉して古代都市の味の語り手とするのは、つまらない觀光客の

低級な好奇心を満足させてゐるよりどれほど功德であらうも知れぬ。

然し今ポンペイを細かく視る前に、自分はその時代がどんな形式と設備を都市に求めてゐたか、概括的な都市相の鳥瞰圖を擧げることが必要と考へる。そして、ポンペイ叙情の背後に繊細な「時代」と云ふ伴奏をかすかながら響かせたい。そして幾分なりとも拙ない自分の筆を補はう。

古代文化の都市に求めた用途は、あながち經濟學者達の二次元的獨斷に依らずとも、ともかく時代の少數優者達の本能享樂の根拠としてであつた。

身内にめぐる狂暴な血が高まり高まつて、どこかに溢れることを求めるならば、劍を磨きサンダルを穿つてアルプスを越え地中海を渡り、これぞと思ふ豊かな富んだ都市を攻略し、數千の肌白い奴隸と山なす財寶を積み、心足りた胸を張つて揚々と歸る。一方、待ちこがれてゐる家郷の市民達は、凱旋門を造り橄欖の葉を振つて遠征の勇士達を迎へ、花の様な奴隸達、凜々しい奴隸達の行列を見ひと轟きあつて、街頭に出る。そして幾度かの光榮ある勝利を勝ち得た、

帝王の力と徳を讃へる爲には、數十町に渡る大理石列柱の美々しい凱旋道路まで造る。(これについてはバルミラが著明)

さて分捕品の分配が了れば、戰士達は瀾達な市民服に着かへ、これから豪奢な市民生活が始る。宏壯極まりなき浴場(奴隷の苦役の結晶である所の)には花の様な奴隷が香油の壺を持つて彼等を待つてをり、闘牛場からは血を涌かす様な歡呼の聲が聞える。劇場ではオルホイスの一幕が酒の様な陶醉境に静まり切つてゐる。更に坦々とした街路をフォーラム(市民廣場)まで歩いて行くならば、前庭には領土の各地からついた眼を奪ふ様な彩の果物が、五月の空の様に、新鮮な匂を放つて所せましとならべられてある。そして又豊醇な酒をなみなみと溢らした壺の数々。

然し瀾達な、空そのものの様に朗かで、強く張つた彼等の心も、ただ神のみはちそれ、あやしみ、うやまふことを忘れ得ない。雨を降らし火を吐き天日を運らす神、鳥を使ひ蛇を使ふ神。國をくつがへす戦も、人一人の生命も、小さ

な子供達の幼い願も、總ての運命は神の御意一つにある。古代都市の額は神殿であつた。

ギリシヤの都市はしかも皆その壯麗な神殿を町に臨んだ丘陵の上に建てた。(ローマ都市の數ある中に、ローマだけがギリシヤ式の神殿を有つてゐた。キヤピトルと稱するのがそれである)。美と酒と藝術と武勇の祭壇である神殿に情調づけられた都市は、牧羊の鈴の音する丘にめぐられた山村にくらべて少くとも牧歌的とは云へまい。

古代の都市はかうした材料から考へてかなり歡樂的なものであつたらう。ただ歴史はその底に蠢動する數萬の奴隷のあつた事を教へる。歡樂の埒外に否、更に悪いことには歡樂の宴に血と肉を捧げ、酸鼻な人生を捨ててゐたことを教へる。殊にローマになると、更に貧民階級が激増して街衢汚泥よりもかしましく、きたなかつたと傳へられてゐる。

歡樂と陰。金と藍。この強い、はげしいコントラストは、たとへ十八世紀工

業戦國の亂世に入つても、再びとは來ぬ程のものであつた。

これだけの概念を入れてポンペイの廢墟を訪ふことにする。

ポムペイはシトロローネとギタの都市ナポリの南にある、小さな灣一つへだてて秀麗な火山ベスビオスを仰いでゐる。

ポンペイが西曆七九年有名なベスビオスの激怒に遇つて呪はれの灰汁の下に埋められた時は、人口實に三萬、面積六十四町歩楕圓型の堂々たる城市であつた。城内中央には都心區フォーラムがあつて、これを中心に公共建築物區があり享樂區がこれをめぐつてゐる。享樂機關としてはおよそ劇場、觀物場（アムヒセアター）浴場等備はらざるはない。劇場も特に特權階級の爲の大劇場と隣り合はして、庶民のため小劇場があると云つた風だ。道路は大道路五條あり各市門に通じ幅の廣さは四五間もある。路面は總て鋪裝してあつて、しかもいかにせまくとも歩車道の區別のないのはない。（實はこれは車道でなく豪雨の雨水はきであるといふ説あり）交叉點には安全島があり水飲み場がそなへてある。

家屋は全部石造の美を盡してゐる。家の中に入れば柱廊をめぐらした四角な中庭があり、石を敷きつめ中央には泉水があつて、愛すべき彫刻の二つ三つを配してゐる。敷石、壁、天井等に今でも美しいモザイクの残つてゐるところを見ても、如何に輪奐の美を盡したかが察せられる。

然しポンペイの特質は淫蕩な、もつと赤裸々な、性の市場のあたりにさがさねばならぬ。遊廊のある道路がある。その前の鋪裝の中央に陽物が一つ刻んであつて指さしの代りをつとめてゐる。妓樓の軒を見ればそこにも亦御神燈に代る同じ様なものが麗々しく掲げてある。ポムペイの發掘品を集收したナポリ博物館の特別室には、往時を偲ばす様な沙汰の限りの品物が山の様にゴロゴロしてゐる。

晝なほはばからぬかうした歡樂の巷を、奴隸達は右往左往蟻の様に働いてゐる。丁度そこへ猿と仇名のあるエセ哲學者チロ、チロニデスが奴隸にかつがれて通りかかる。下れ下れチロ、チロニデス様のお通りだ、お通りだと怒號する